
359回目のプロポーズ

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

359回目のプロポーズ

【Nコード】

N3391Y

【作者名】

28号

【あらすじ】

ついに女子高生を卒業し、最愛の先生との同棲を始めた私。でもせっかく家族になれたのに、先生は冷たいままだった!!
先生、そろそろ手ぐらい出してください!!

女子高生からワンランクレベルアップした悲劇の少女と高校教師の恋のお話【358回目のプロポーズの続編です】 11
/17本編完結しました

童話のような恋の始まり(前書き)

358回目のプロポーズの続編です

童話のような恋の始まり

昔々あるところに、それはそれは美しいお姫様がおりました。

そのあまりの美しさに、お姫様に結婚を申し込んだ王子の数は1000を越えるほどでした。

しかしどんなに素晴らしい愛の言葉を聞いても、お姫様は首を縦に振りませんでした。

なぜなら、お姫様には心に決めた相手がいたのです。

相手はお姫様を守る騎士でした。

優しくて強くて、そして他の誰よりも自分を愛してくれる騎士様が、お姫様は大好きでした。

それを知った王様はお姫様の幸せを一番に願っていたので、さっそくお姫様と騎士様を結婚させることにしました。

身分の差はあれど、とてもお似合いの二人を国中が、いえ他の国の民までもが祝福しました。

けれどただ一人、騎士に恋をしていた一人の醜い魔女だけは別でした。

二人の幸せを妬んだ魔女は、結婚式の前日お姫様に呪いをかけてしまったのです。

「美しき姫よ、貴様は我が呪いにより今日この日より愛を得られぬ定めとなった。例え命果てたとしても、新たなる生を得たとしても、貴様は孤独から逃れることが出来ないのだ」

途端にお姫様は死の病にかかり、みるみる衰弱していきました。死に行くお姫様は愛を得られぬ身となった事を嘆き、騎士様の手をそっと取ります。

「私のことは忘れてください。そしてあなたは幸せになつて下さい」

けれど騎士様は首を横に振りました。

「例えこの生で貴方と添い遂げられなくても、私は何度でも貴方を愛します。魔女の呪いが消え、貴方と添い遂げられるその日を迎えるまで」

その約束は二人の愛と絆を強くする魔法に代わり、程なくして騎士様もお姫様の後を追うように亡くなってしまいました。

けれど二人の恋はここで終わりませんでした。

二人は別の世界の、別の時代の別に人間として生まれ変わる事ができたのです。

全く新しい体でしたが、二人には前世の記憶があったので、目を合わせた瞬間お互いの存在がわかりました。

けれど魔女の呪いはまだ残っていたので、この時も二人の恋は実現しませんでした。

その後も二人は何度も生まれ変わり、そして同じ数だけ恋をしました。

けれどもそのたび戦争や、呪いや、身分差や病気などで二人は引き裂かれる運命を繰り返します。それほどまでに魔女の呪いは強かったのです。

でも二人は諦めず、何度も何度も恋をしました。

そんな二人の努力と愛の強さが、神様に届いたのでしょう。

ついに二人は、何の障害もないとても平和な世界の、平和な時代の、平和な国に生まれる事が出来ました。

そして二人は358回も悲恋を繰り返してようやく、本当の恋人になれたのです。

童話のような恋の始まり（後書き）

前作未読の方は、そちらから読むことをオススメします。

念願の同棲と先生の手料理

「……めでたしめでたしっ」と

作業を終え一息ついている私に、降り注ぐ冷やかな視線。

けれどその先にいるのは最愛の人だとわかっているから、私はニッコリ笑顔で顔を上げる。

「何してる」

そう言っただけで私の手元に目を落とす彼は、私の元先生で、そして運命の人。

「お仕事です」

「クレヨン使ってたか？」

「こういう方が絵本としては味が出ると思うんです。これを出版社に持ち込めば絶対売れます」

「こんな下手な絵で？」

「確かにちよつと不恰好ですけど、物語は自信ありますから！何せ私と先生の大河ドラマ的トゥルーパーですからね！」

そう言った瞬間、先生は絵本をパラパラとめくり、そして最後のページを破り捨てた。

「何するんですか！」

「フィクションが混ざってたから」

「フィクションじゃないです！」

「誰が恋人だ誰が」

「恋人でしょう！ こうしてひとつ屋根の下に住んでいるのに！」

「今すぐかがみ見てこい」

「それにほら、ご飯だって作ってくれるし！」

そう言っただけで先生が持っていたホットケーキを指させば、彼はそれを引っ込めようとする。

「もういい、お前にはやらん」

「ああああ、せっかくの初手料理が！」

「食いたいならそこ片づける」

慌ててクレヨンと画用紙を片づけると、先生が私の前にとても美味しそうなホットケーキを出してくれた。

「ああっ、でも食べるのが勿体ないです！」

「お前なあ」

「先生が始めて私のために作ってくれた手料理ですよ！ これは冷凍保存するべきです！ ホルマリン漬けでも良いです！ とにかくお墓まで持つて行くべきです！ むしろ来世まで持つて行きたいです！」

「馬鹿言つてんな」

「だって、貴重じゃないですか！」

「もういい、食わないなら俺が食う」

と言つて皿を持ち去ろうとする先生の手に私は飛びついた。

「馬鹿やめろ！」

だがその衝撃で、先生の腕が皿ごと傾いた。

そして落ちるパンケーキ。むろん落ちた先は床である。

「ああああっ！」

私が叫べば、先生自慢の拳骨が私の後頭部に炸裂する。

「本当にアホだなお前は」

「さっ3秒ルールがあります！」

慌ててホットケーキを拾い上げ、何事もなかったかのように皿に乗せた。

床はフローリングなので目立った外傷はない。よし。食べれる。

「食うな馬鹿」

「でもせっかく先生が焼いてくれたのに！」

このままゴミ箱行きになんてさせない。

むしろゴミ箱に捨てられても私は拾い上げて食べる。

そう宣言しようと思つて姿勢を正せば、唐突に先生は自分のパンケーキを私の前に差し出した。

意味がわからない。理由がわからない。どうして良いかわからな

い。

そんな顔で先生を見つめている私から皿を奪うと、先生は落ちたホットケーキにバターとハチミツをかけ、さっさと食らいついてしまった。

「先生、それ落ちました」

「3秒ルールだろ」

「そう言う優しさが、胸キュンです。大好きです。愛しています」
言葉にならぬほどの愛を必死に言葉にしていたのに、ハチミツのボトルで頭を殴られた。

でもやっぱりその痛みもまた愛おしい。

「私、先生と家族になれて良かったです」

「……その言葉、語弊があるからやめろ」

「だって家族でしょう！ これ家族でしょう！ 養ってるでしょう私を！」

興奮のあまり先生の胸に抱きついたが、残念ながら今の私は先生に腕を回せるほど体が大きくはない。

それは物足りないが、こうして側にいて、一緒にご飯を食べられるのは凄く嬉しい。

「いやあ、死んでよかったあ」

思わず微笑めば、今度こそ先生が本気で怒った。

「貴様の所為で、子持ちになった俺のことを考える！」

「世間的にはそう見えるかも知れませんが、私は奥さんですよ。夜のお供だってバッチリですよ！」

「奥さんじゃねえし、4歳児に夜のお供なんてさせられるか！」

先生は怒ったが、私がてへへと笑うとやる気を無くしたように肩を落とす。

「何で俺ばかりこんな目に」

「運命だからですよ」

そう言って先生の頬にキスしたら、朝食のパンケーキを取り上げられた。

勿論手を伸ばしたが、頭の上まで持ち上げられてしまったので今度は全然届かなかった。
さすがに、4歳児のリーチは短い。

幸せな朝とお見送り

先生の1LDKのアパートで同棲を始めて、そろそろ3週間がたとうとしている。

同棲と言うと先生は必ず怒るが、これを同棲と言わずして何を同棲というのか。

血の繋がらない男女がひとつ屋根の下にいるのだ。

そのうえ一緒にご飯を食べて、テレビを見て、同じ布団で寝る。

正確には別々の布団だが、深夜にこっそり先生の布団に潜り込んでいるので一緒に寝ているも同じだ。

勿論起きた途端に怒られるが、それでも先生は怒りながらも朝ご飯を作ってくれる。

何よりもこれが凄く嬉しい。

前回うつかり死んでしまった私は、親の愛情と暖かい手料理が不足しがちな家庭に生まれてしまったので、こういう暖かい朝に憧れていたのだ。

その上、それをもたらしてくれるのが先生であるのが更に嬉しい。

「先生、やっぱり感動です」

そして今朝も、先生は私のためだけに朝ご飯を作ってくれる。

それがあまりに嬉しくて、私は先生の足にギュッと抱きついた。

「邪魔だからあっち行ってろ」

「今はこうしていたいんです」

甘い声音で言ったつもりなのに、先生には効果がなかった。それどころかオタマで頭をこづかれた。

「人肌が恋しいなら、この前かかってやったクマでも抱いてる」

「私は先生の温もりが欲しいんです」

と主張したのに、先生は私を引きはがすと、古いちゃぶ台の前に座らせる。

男の一人暮らしの所為か、先生の部屋は雰囲気も家具も古くてジ

ジ臭い。

高校ではまだ若い子にキヤーキヤー言われているようだが、私生活ではその真逆を行く地味さなのである。

元々キラキラ系イケメンではなかったが、私の居ない4年の間に若さとやる気を失ってしまったようなのだ。まあ元々ある方ではなかったが。

故に私の前に置かれる朝食も、ジジ臭いちやぶ台に似合う茶系の物ばかりである。

たまに手抜きでパンケーキを焼く日もあるが、大体はご飯とおみそ汁と焼き魚に煮物と納豆という取り合わせだ。

てつきり先生「洋食だと思っていた私は、先生の得意料理に最初は驚いた。

王子様やアイドルと呼ぶほど線は細くないが、先生はとても凛々しくてハンサムだ。例えて言うなら、ロマンス小説に出てくる若い御曹司とか若社長的な知的な風貌である。口は悪いけど。

だからもう少しハイカラで洒落た生活を想像していたのだが、今朝のメニューも焼き鮭と納豆中心のオシャレとは真逆のメニューだ。とはいえ、外見と生活感のギャップが物凄くそそるので私的には問題はない。

特に朝から納豆をかき込むその姿を見ていると胸がきゅんとする。

先生と納豆の組み合わせなんて一緒に暮らしていなければ絶対に見られない。そして口から糸を引く姿はどこかエロチックで凄く良い！と私は思うのである。先生は理解してくれなかったが。

だが残念ながら、朝の納豆タイムはおあずけのようである。

ちやぶ台に並んだご飯は1組だけで、先生は食事を取らずに慌ただしく着替え始めてたのだ。

「今日は早いですか」

「ああ。でも夜は早く帰れるから」

「じゃあ、いっぱい愛し合えますね」

酷く冷たい視線を浴びながら、私は焼き鮭をほぐした。

「やっぱり飲んでくるから、お前今夜はそのカップ麺な」

「子供にカップ麺なんてダメですよ！ もっと栄養のある物食べさせないと！」

「子供だって言うならアホな台詞吐くな」

「だって、全然ラブラブしてくれないから」

「当たり前のように出来ると思ってるお前の頭が心配だ」

「じゃあ、ラブラブしなくて良いから今夜も一緒にご飯食べたいです」

本当は諦めたくないけど、一人でカップ麺よりはマシだ。

けれど妥協は功を奏し、先生の視線の冷たさが僅かに消えた。

「……スーパー寄ってくるから、食べたいものあれば言え」

「じゃあハンバーグ！」

「なら夕方はお菓子食うなよ。冷蔵庫にプリン入ってるから、3時のおやつはそれだけにしとけ」

「了解です！」

「あと新聞の集金が来るかもしれないけど、絶対出るなよ」

「別にお金くらい払えますよ、子供じゃないですし」

「お前が一人で家にいること、あんま他人に知られたくないんだよ」

「それは、『お前は俺の物だから誰にも見せたくない』って事ですね」

視線が更に冷たくなったが、先生は出るなと念を押すだけだった。それから先生が鞆を持ったので、私は食事を中断し、玄関までお見送りをした。

「言われたこと守れよ」

「守ります！ だから、いつてきますのチューしてください」

したくねえ、と先生は顔で語った。せめて言葉に出して欲しい。

「してくれなきゃ訪問販売で変な物買っちゃいますよ！ あと朝日新聞と読売新聞と日経新聞と契約して、先生のお財布を軽くしちゃいますよー！」

我ながら良い脅迫だと思ったのに、キスの代わりに殴られた。

「やったら捨てるからな」

本当に捨てそうな顔をしていたので、仕方なく引き下がった。

相変わらず先生は容赦がないのだ。照れ隠しの時も多々あるが、怒りっぽいのは相変わらず、と言うかむしろ悪化している。

私のように一回死んで、もう少し優しい先生に生まれ変わった方がいい気がするくらいだ。

「いつてらっしゃいませ」

「ん」

愛想がない返事と共に先生は行ってしまった。

なんて体験しても、先生がいなくなる瞬間は寂しい。

でも仕事に行くだんな様をお見送りするのは長年の夢だったので、これはこれで満足でもある。

「でもキス欲しいなあ」

誰もいないのをいいことに、私は欲望を口にしながらリビングに戻る。

それから私はご飯を食べ、撮り溜したアンパンマンでも見ようとテレビに向かった。

前世の記憶や知識はあるが、やはり子供の体には子供向けの物が合うようで、あれだけ面白くないと思っていたアンパンマンも、無性にワクワクしながら見れてしまうのだ。

同じストーリーでも楽しいため、先生が帰るまで延々アンパンマンを見て過ごすのが私の日課である。

もしくは図書館で借りてきた絵本を読むか、積み木遊びなどもする。

見られると恥ずかしいので勿論先生の前ではやらないが、その手のオモチャを時折買ってくるころ、たぶんばれているのだろう。

先生恐るべしである。

「……あれ」

しかしそんな抜け目のない先生でも、ミスをすることはあるよう

だ。

ふと見ると、机の上にお弁当が置き忘れている。

帰ってくる気配がないところ、気付いていないのだろう。もしくは気付いたが時間が無くて取りに帰れないか。

どちらにしる、給食も食堂もない高校でお昼がないのは一大事だ。

そう思った瞬間、『旦那の忘れ物を届ける新妻』という新しい憧れシチュエーションが頭をよぎった。

これは是が非でも白いエプロンを纏いお弁当を運ばねば。

そう決意すると同時に、私は万が一の時のために渡されている合鍵を掴んだ。

幸せな朝とお見送り（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

苦難の始まりは身内と同期から

「真田、お前子どもが出来たって本当か！」

同僚の長谷川が大声で怒鳴り込んできた瞬間、俺は色々な意味で終わったなと思った。

朝の職員室には教師だけでなく生徒も多くいたし、そのうちの何人かは俺の返答も聞かずに物凄いスピードで教室を出て行った。

たぶんあの顔は新聞部の生徒だ。きつと次の休み時間には、誤解まみれの号外が学校中に張り出されているだろう。

「黙ってないで何とか言え！」

「お前こそ黙れ」

本気で睨めば乱暴な言葉は引つ込んだが、周り全員が俺の答えを待っているのは明白である。

「誰から聞いたんだその話」

「聞いたんじゃないって見たんだよ！俺のかみさんが、郊外のショッピングモールで、お前が小さい女の子連れてるのを！」

人目につかないよう近場での買い物は避けていたのに、まさかこの男の身内に見られるとは俺も本当に運がない。

「それで、あの女の子は誰なんだ！」

親戚。

と思わず答えそうになったが、ここで下手に嘘をついても調べる輩が出てくるのは明白だ。ならばおかしな誇張を加えられる前に、真実を話した方が賢明かもしれない。

「訳あって引き取った子だ」

「それってつまり養子って事か？それとも元々はお前の子で、それを元カノが隠してたとか修羅場的な……」

「勝手に昼ドラみたいなの妄想すんな！」

「けど突然すぎるだろ」

「俺だって困ってる。引き取ってきたのはそもそも兄貴なんだ、付

き合つてた女の子供らしくてな」

「じゃあ兄貴の隠し子か？」

「全く関係ない子だよ。実家が資産家だつてこぼしたら、『代わりに育ててください』って手紙と一緒に押しつけられたつて話だ」

やっぱり昼ドラじゃねえかと言われ、俺は少しだけ考えを改める。もつとおかしな事があつたので失念していたが、確かにこれはフイクション並みにきてれつな話だ。

「でもなんでそれをお前が」

「兄貴の性格知ってるだろ。カツコつけて貰ってきたはいいが収入もロクにねえし、実家に預けてトンスラだ。オヤジとお袋は激怒してガキを今すぐ捨てるとか言い出すから、渋々俺がな」

「俺がなつてお前、子供なんて育てられるのかよ」

「ある意味手はかからないガキだから、まあなんとか」

「でもお前まだ30だろ、子供なんかこさえて結婚とかどうする」
あんな子供じゃ逆立ちしたつて無理だろう。と思つたが勿論それは言わなかつた。

言えるわけがない。子供が出来たことはともかく、これだけはばれるわけにはいかない。

あのガキが、まさかあの問題児だつたなんて。

「あついたいた！ 先生！」

けれど運命とは残酷な物で、どういうわけだか職員室の入り口に、最も見たくない小さな人影が立っていた。

その上そいつは俺の所まで来ると、もう4年ほどおいたままになつているパイプ椅子を開き、そこにちよこんと腰を下ろす。

「何しに来た」

「お弁当忘れたから届けに来ました。つていうかこの感じ久しぶりですね。あ、校長先生お久しぶりです！ 長谷川先生も老けましたねえ、ジャージが前より似合ってますよ！」

言いながら俺の肩に頭をくっつけてくるその姿に、長谷川が時を止めている。

彼だけでなく、古株の先生達が物凄く驚いた顔をしている。

この椅子に座り、毎日のように輪廻転生や悲恋の話をしていた生徒のことは、俺だけでなくみんなの記憶に焼き付いているのだろう。まあ忘れようがないインパクトがあったのは事実だ。

「真田、まさかその子……」

「俺も信じられないというか信じたくないけどな」

俺の言い方が不満だったのか、こちらを睨む視線を感じる。勿論無視したが。

その一方で、長谷川が諭すように俺の肩を掴んだ。

「……ロリコンは、ダメだぞ」

「誰が手を出すかこんなちんちくりん！ 兄貴の拾ってきたガキじやなかったら今すぐ捨ててるところだぞ！」

「でも、だってお前、これお前のチカちゃんだろ……！」

「お前のつてなんだよ」

長谷川の言葉に俺は唸り、代わりにチカが得意げに胸を張る。

「そうです！ 真田先生の永遠の恋人小林千佳です！ っていっても今は北山姫輝芽^{ティアラ}って酷い名前なんですけど、ともかく帰ってきてましたよ！」

机の上に立ち胸を張る4歳児に、何故だか職員室に拍手がわき起こった。

中には感動して泣いている教師もいる。と言うか校長と教頭は号泣しすぎてティッシュを消費しまくっている。

でもここは感動するポイントでも喜ぶポイントでもない。

そう言いたかったが、多分誰もきかないので俺は黙って耐えるほか無かった。

苦難の始まりは身内と同期から（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

幸せすぎた一日と死んでも治らないドジ

学校からの帰り道、先生と繋いだ手をギュッと握り、私はスキップしながら家へと向かっていた。

勿論先生は「こいつうざいな」という顔をしていたが、私に合わせて歩調はゆるめてくれている。そう言うところがたまらなく好きだ。

「ご機嫌だなお前」

「だって、久しぶりに先生達とお話できて楽しかったんです」
アンパンマンと積み木があれば満足だけど、やっぱり一人で家にいるのはちょっぴり寂しい。

でも今日は代わる代わるいろんな人が相手をしてくれたし、お昼も先生と一緒にだった。それも念願の屋上ランチである。

学生の頃は断固拒否されたが、「二人でゆっくりしてきなよ」と気を利かせてくれた長谷川先生のお陰で、初めての屋上ランチが成功したのだ。

「今日は本当に幸せでした」

「俺は最悪だったかな」

しかし先生は相変わらずつれない。なので私は、今日がいかに素敵な日であったかを熱く語った。

やっぱり先生は「こいつうざいな」という顔をしていたが、私はそれを無視してひたすら語った。

「ほら、先生も素敵だって思い始めてきたでしょ？」

「そういえば、スーパー寄るんだっただな」

「って何ですかその誤魔化し方！ やる気はないし違和感ありまくりだし、何か傷つくんですけど！」

「お前の話はいつもいつも暑苦しくて聞くにたえねえんだよ」

「先生はドライすぎます！ スーパーより今は私の話を聞いてください！ そして同意して下さい！」

「じゃあ、今日ハンバーグ焼かなくて良いんだな」

「ハンバーグを人質の取るなんて卑劣な！」

「どうする？ カップ麺でいいのか？」

勝ち誇ったその表情にはさすがにムツとしたが、ここで怒ると本気でカップ麺を出されそうだったので、私は渋々先生と一緒にスーパーに入った。

「乗るか？」

でもそうやってカートの子供用シートを指さされたときは、さすがに我慢ならなかった。

「奥さんはそんなところ乗りません！」

「後で疲れたとか言ってもだっこしてやらんぞ」

確かにはしゃぎすぎて疲れているのは事実だが、これは屈辱だ。

「大丈夫です、ちゃんと歩きます」

そういつて、私は先生のズボンの裾をギュツと掴んだ。

「私は子供じゃないんですよ」

「じゃあ菓子もいらなんだな」

けれどそういつて、これ見よがしにお菓子のコーナーに立ち止まられると言葉が詰まる。

これは明らかな罠だ。先生の嫌がらせだ。かなり心がぐらついたが、ここでラムネやマールチョコ辺りに飛びついたら絶対に笑われる。

「子供じゃないっていつてるじゃないですか！ お菓子なんていりません！」

「一個くらいなら買ってやるのに」

「いらないつたらいりません！ それ買うくらいなら先生のビールにしましょう、いつも安い奴だしたまにはプレミアムな奴にしましょうー！」

「いらん気を使うな」

「奥さんだつたら気を使うのは当然です！」

そういつて胸を張つたのに、先生はお菓子の棚の前にしゃがみ込

む。

私の顔をじつと見た後、先生が手に取ったのは瓶の形を模した容器に入ったラムネと、マーブルチョコだった。

「これだな」

なぜわかった！　と思わずのけぞると、先生がマーブルチョコで私の額をこづく。

「お前は分かりやすい」

「ってか先生、それ1個じゃないです」

「チョコは酒のつまみに俺が食う」

「とか言って私にくれるんでしょ！　先生優しいです！　惚れます

！　もう惚れてるけど更に惚れます！」

「お前の前でこれ見よがしに食ってやる」

ウンザリした顔だったけど、結局先生はマーブルチョコを私に持たせてくれた。

それが嬉しく私は子供のようにはしゃいでしまった。

はっと我に返ったときには、先生がおかしそうに私を見ていた。

やはりこれは罠だったようだ。

「先生、これは少し魔が差しただけですよ」

「そう言うことにしておいてやる」

とか言いつつ先生は明らかに笑いをこらえていたので、私は自分がいかに素敵で色気のある大人の女であるかを説明しようとした。

けれどなんだか上手く口が回らない。どうやら少しはしゃぎすぎたようだ。

「お前、カートに乗らなかつたこと後悔してるだろ」

そして先生はやっぱり聡い。

「そんなことないですよ」

まだまだ全然平気だとスキップをしようとしたら足がもつれた。

くそ、4歳児の体力のなさが憎い。

「お前は本当に馬鹿だな」

「そんなしみじみ言わないでください」

「いや、少し感動してるんだ。馬鹿とドジは死んでも治らないって言葉は本当なんだなと」

「それを言うなら馬鹿は死ななきゃ治らないですよ！」
と言いつつ、実際抜けているのは事実なので、それ以上の反論は出来ない。

それにこの欠点は私のチャームポイントでもある。先生は忘れて
いるが、騎士であった頃、私と先生の出会いを繋いだのはこのドジ
のおかげなのだ。

たしかあの日、私は一国の王女でありながら、ぬかるみに足がは
まり大ピンチに陥っていたのだ。

そこに颯爽と現れ「失礼します」とスマートな身のこなしで私を
足を引き抜き、汚れてしまった靴を磨いてくれた人こそ彼である。
そして私はその手際の良さに惚れこんだのである。

思い出すだけで高鳴るこの胸。ああ、やっぱりこれは恋の証。

「アホ面で何考えてるんだよ」
そう言う先生はあのころとは真逆の、害虫を見るような目を私に
向けている。

それを見ているとほんの少しだけ、あのころのスマートさが懐か
しいと思った。

冷たい態度も勿論素敵だし大好きだが、私だって年頃の乙女だ、
心が痛むときもあるのである。ただあまり気にしないだけで。

「アホ面は酷いです、こんな可愛い顔なのに」
頑張つて可愛い顔をしようとしたが、さすがにもう体力に余裕が
ない。

「……つたく、仕方ねえな」

そんなとき、先生がすつと私に手を伸ばした。
手と共に差し出された言葉は全くスマートではない。
けれど先生は、私を右手で軽々と抱き上げてくれる。

「先生素敵です」

「そこはありがとつだろ普通！」

右手に私を左手にカートを持った先生は、怒りつつもスタスタと歩き出す。

触れあう胸と胸、伝わり合う温もり、鼻いっぱい広がる先生のおい。

「しあわせだなあ」

「お前はな」

「そうだ先生、明日も一緒に学校行って良いですか！」

「ダメに決まってるんだろ！」

「じゃあ、一週間に一回とかでも良いんです！先生の側にもっといたいんです！」

だから来週またつれてってくださいと微笑むと、先生がため息をひとつこぼした。

「来週って、おまえ今度の月曜日から幼稚園だろ」

時が止まった。ように感じられるほど、その言葉は衝撃だった。

「今なんて？」

「幼稚園。前に申請出してたところに入園できることになった」

「きいてませんよー！」

「いつてねえもん」

自分の年を考えれば言わなくてもわかるだろうと、さも当たり前前だという風に先生は語る。

どうやら今日の幸せは、今後の不幸の前触れであつたらしい。

幸せすぎた一日と死んでも治らないドジ（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

後悔の朝と特別なお見送り

嫌がる予感はしていた。

けれどまさかここまでとは思わず、俺は押入の中に籠もったままもう1時間も出てこないチカに頭を抱えていた。

「早く出ないと、幼稚園のバスがきちまうだろ」

「いやです、絶対行きません！」

「何でそう嫌がる」

「人生経験豊富なこの私に、今更カスタネット叩いたりお絵かきしたりピアニカ吹いたりしろって言うんですか！ さすがに屈辱です！」

「けど前の人生でもいつてたんだろ、幼稚園」

「そこに先生が……、運命の人がいるかも知れないから通ってたんです！ 小学校も中学校も高校も、全てはあなたとの出会いを探す為に通ってたんです！」

「ならまたいるかも知れないだろ、本当の運命の人が」

「私の運命の人は先生です！」

「4歳でそれを決めるのは早いつて」

「早くないです、こちらもう358回も人生やり直してるんです！」

「ともかく、幼稚園には通え」

「嫌です！ 昼間一日中ゴロゴロしてたいんです！ 先生の服のニオイを嗅いだり、下着のニオイを嗅いだりしたいんです！」

「たまに下着が見あたらなかったのはこいつの所為か。」

「今ので、お前がいかに自堕落な生活を送っているかがよくわかった」

「自堕落で良いじゃないですか！ 私まだ4歳なんですよ！」

「お前をちゃんと育てるって条件で、おやじ達から奪ってきたんだ。兄貴も気分屋だし、下手に手抜きがばれたら後々ややこしい」

そう言えば、チカは今更のように、自分がややこしい身の上であることを思い出したようだ。

僅かな沈黙の後、ゆっくりとだが押入の戸が開く。

その向こう側にいたチカは、勿論不機嫌そうな顔だ。けれどこれ以上口論している時間はもうない。

「支度するぞ」

「……わかりました。でも条件があります」

「なんだよ」

「……キスしてください」

「はあ？」

「バスに乗る前、いつてらっしゃいのキスしてください！」

そしたら1日頑張るとチカは言う。

保護者が4歳児にキスするのは珍しいことではない。珍しいことではないが、俺にとっては究極の選択である。

「してくれなきゃ行きません」

そう言っ腕を組むチカは、絶対譲らないという目で俺を見ている。

こつなつたら、こいつはこちらが首を振るまで絶対動かない。

そしてこの頑固さに、4年前の俺は散々振りまわされたのだ。

「……額だつたら、してもいい」

唇はさすがにまずい。頼も妙に気恥ずかしい。故に選んだ最終候補地だつたが、途端のチカの機嫌が良くなった。

「支度します！」

意外とあつけない、と思ったことは勿論口にせず、俺はホツとした顔でチカの着替えを眺めていた。

最悪今日は俺自身が幼稚園まで運ばねばならないかと思っていたが、これならばバスにも間に合う。

「あ、ちなみに帰りはどうすれば良いんですか？」

言われて、今更のように大事な事を伝え忘れていたのに気付いた。そしてそれを他ならぬチカから問われ、さすがに自分が情けなく

なる。

「今日は8時前に幼稚園まで迎えに行く。日によって前後するかも知れないが、俺の帰りの時間は大体わかるな」

「結構遅くまで預かってくれる幼稚園なんですね」

と言うなり、チカが大人ぶった顔で声を小さくする。

「それなりのお金、取られるんじゃないですか？」

「そう言う心配はするな」

「しますよ！ 奥さんですから、家の財政は把握しておかないと」

「計算できるのか？」

「先生に微積分教えて貰ったじゃないですか！」

そう言っただけで怒るチカは本当に大人びていて、俺は彼女の幼稚園行きを勝手に決めたことを少し後悔していた。

チカにはああ言ったが、彼女を幼稚園に入れたかった本当の理由は、あまりにしつかりすぎていてチカが、せめて年頃らしく自由に遊べるようにと思ったからだ。

それに本人は隠しているつもりかも知れないが、チカは寂しがりやだ。

学校に来たとき、チカは家に一人で居るときよりずっと生き生きしていた。

だからこそ少しでも楽しく過ごせるようにと、俺は幼稚園入学を決めた。

けれど、手際よく準備を始めたチカをみて、俺は今更のように気付く。

もしかしたら、小さな子供達の中にいる方が、チカは大変なのかも知れないと。

よくよく観察すれば子供らしい遊びには興味を示しているが、同じ年代の子供と遊ぶのはまた別だろう。

そんなことにも気付かなかった自分に、俺はあきれ果てる。

「先生、バスそろそろ着ちやいますよ」

けれど俺の葛藤などつゆ知らず、幼稚園の制服に着替えた千佳は、

得意げになつてくるりとスカートを翻す。

「そそりますか？」

「そそるか！」

「えー、これが見たくて幼稚園に入れようとしてたんでしょ？」

どうしてそう言う考えになるのかわからないが、まあこれもいつものことだ。

「これが鞆。あとピアノカだ」

「懐かしい重さです」

しみじみとピアノカを担ぐチカは4歳児というより、昔を懐かしむ大人の顔をしている。

それが心配で、俺は彼女の側に膝をついた。

「何かあったら、すぐに言えよ」

「大丈夫ですよ、空気読めないとか散々言われてますけど、年相応の振る舞いをするのは慣れっこなんで」

バツチリ幼稚園児になつてきますと笑うチカは、多分俺の言葉の意味に気付いていない。

まあこいつが俺の言葉を正確に理解したことなど一度もないが。

「そんな心配そんな顔しないでください。先生のキスがあればチカちゃん全力で頑張ります！」

「頑張らなくていい」

「頑張りますよ、だからここにちゅーしてください！ 触れるだけでも良いです、それだけでパワー百倍です！」

いつもはあれをしるこれをしるという割に、彼女が本気で求めるのはいつだって些細な物だ。

そしてそう言うギャップに、多分俺はほだされてしまうのだろう。「わかった。あと今日は特別だ」

見上げるチカの唇にそつと口づけを落とす。短く触れるような物だったが、4歳児相手にはこれで十分だろう。

むしろ刺激が強すぎたかも知れない。

そう思つて顔を上げたのに、チカは喜ぶどころか顔をしかめた。

「これで1ヶ月分とか、そう言うセコイ事言わないですよね」

「……そうして欲しければそうするが？」

正直、腹が立った。やはりこいつは何もわかっていない。

「それは嫌です！ 明日も欲しいです、毎日欲しいです！」

とか喚いているチカとその荷物を抱え、俺は家を出る。

丁度バスが見ついたところだったので、これ幸いと俺はチカをバスに放り込んだ。

こいつのためにあれこれ悩んだ自分が馬鹿みたいだ。そう思いつつ、俺は窓に張り付くチカから目を背けた。

初めての友達

ヒグマ組。

可愛いらしさが微妙に欠けているそのネームタグがついた教室が、私のクラスだった。

名前のセンスからヤクザの息子でもいそつだなとつかり思ってしまったが、さすが先生が見つけただけあり、クラスメイト達は皆育ちの良さそうな子供ばかりである。

とはいえ普通だからこそ、彼らは季節外れの新顔を警戒していた。でもこの手のことには慣れていて。こっちは場数が違うんだ場数

が。
「チカです。チカちゃんってよんでください」

女の子に嫌われないように照れを8割、男子に好印象を与えるように可愛らしさ2割の挨拶をすればクラスメイト達は皆チカちゃんチカちゃんと笑ってくれる。

その後お絵かきの時間やお歌の時間を使って園児達の力関係を観察し、必要なところに媚びを売れば、あっという間にクラスに馴染んだよい子の出来上がりだ。

女王様系の女子がいないのも功を奏し、ひとまずクラスでの居場所を確保した私は、「完璧園児チカちゃん」となるべく、お昼寝前の自由時間を使い、幼稚園中の園児と先生の動向を観察していた。ちなみに校庭の端にある、ジャングルジムの上からである。

園庭には子供が多くいるが、ジャングルジムは流行ではないのか私の城となっている。

そのこの頂きに立ち、幼児どもの一挙一動を観察する私は我ながら腹黒いと思うが、3年ものあいだここに通うのである。下手に弾かれたら先生が心配するだろう。

とはいえ正直なところ、少しくらい心配させたい気持ちもある。

世の中の4歳児がこの手の施設に通うのが当たり前となっている

のはわかる。わかるけれども私は普通ではないし、それを先生もわかってきていると思っただのだ。

そりゃあまあ、実際は通ってみるとお絵かきの時間は楽しい。

ピアノ力を吹くのも悪くないし、カスタネットを叩いているとテンションも上がる。

けれど私は先生の恋人で、奥さんになる予定の存在なのだ。

それを幼稚園に入れるなんて信じられない。

「お前を閉じこめておきたい。俺の腕の中にずっと」位の気持ちがあつてしかるべきだと思うのだ。

なにあんな軽々とバスに放り込まれたら、さすがの私も傷つく。

キスは……キスは思い出すだけでにやけるほど嬉しかったけど、やっぱり悔しいのだ。

私は一体先生の何なんだろう。

そう柄にもなくナイーブになるくらいに、私は傷ついたのだ。

とはいえククヨクヨもしてられない。わからないならわからせればいい、それが私のポリシーだ。

とりあえず、私に好意を抱いている園児が既に3名ほど居るので、彼らをたらし込み、先生の前でキスのひとつでもしてやろう。そうすれば先生もやきもちを焼き、きっと私の大切さを認識するに違いない。

そうだそれがいい、そうしよう。ちょっと心は痛むが、これも夫婦円満のためである。

「いやそれ、絶対上手く行かないと思うよ」

不意に、酷く大人びたツツコミが聞こえてきかけた。どうやらうつかり考えを漏らしていたようだ、危ない危ない。

「ねえちよつと、きいてる」

私はハッと口をつぐむ。それから慌てて視線を下げると、そこには同じクラスの……えつと……

「タカシだよ。長谷川タカシ」

慌ててジャンブルジムの下に立つ少年を見れば、彼は見覚えのあ

る笑顔を私に向けていた。

「あんたの通つてた高校にいる長谷川は俺のオヤジ。あんた、噂のチカちゃんだろ？」

何故それを知っているのか、そもそも何故こんなにも大人びた喋り方をするのかと驚く私に、タカシ君はもう一度微笑んだ。

「君のことは親父からきいてたんだ。前世とか運命とか凄い言葉で高校教師をたらし込んだ子がいるって、親父が笑いながら喋っててね」

その説明の仕方はどうなのかと思うが、今の問題はそこではない。流暢に喋り、そして無駄に色気たっぷりな微笑むタカシ君である。

「そう警戒しないでよ、俺が君に興味を持ったのは俺が君と同じ境遇だからなんだ」

「同じ境遇？」

「俺も前世を覚えてるって言ったら、少しは興味出た？」

出るところではない、驚きのあまり、私はうっかり足を滑らせた。けれどそんな私をタカシ君は軽々と抱きとめる。凄いなタカシ君。

「二人でちよつとフケない？ チカちゃんとは色々お話ししたいんだ」

そう言うタカシ君には物凄く驚いた物の、はじめて見る同類に私は思わず頷いた。

片づけられないパイプ椅子

「お前、今日やたらと時間気にしてるよな」

長谷川が絡んでくるのはいつものことだが、今日はいつにもまして馴れ馴れしい。

「まあわかるぞ。俺もタカシがはじめて幼稚園に行った日は、ずっとそわそわしてた」

「お前と一緒にするな」

「うんまあそうだよな。チカちゃんは子供兼奥さんだもんな」

「だから違う」

「隠さなくていい。大事で仕方ないんだろ、目に入れても痛くない、むしろ目に入れていくらいなんだろ？」

一人盛り上がる長谷川があまりに五月蠅くて、俺は思わずチカにやるのと同じ要領で奴の頭に拳骨を入れてしまった。

「これ以上何か言ったら、今度は本気でやるぞ」

「素直じゃねえな」

言いつつ、長谷川はチカのパイプ椅子に座り語るモードに入っている。

どうして今日に限って、こいつと同じタイミングで授業がないのだろう。

「まあ安心しろ、チカちゃんだったら上手くやるさ。むしろ今頃友達100人くらい作ってるかもな」

実際に作っついていそうだから怖いのだ。俺が絡まなければあいつは何でもそつなくこなせる器用さがある。

高校時代だって俺にアタックする所為で女子生徒からいじめまがいのことをされていたが、同じ数の女子生徒から応援されていたのも事実だ。

多分コミュニケーション能力は無駄に高い。それを俺に使ってくれないのが腹立たしいところだが。

「あいつが上手くやるのはわかってる」

「じゃあれか、今頃違つ男に言い寄られていないか心配してるのか？」

「男ってお前なあ」

「幼児だと思つて甘く見たらダメだぞ、俺の息子なんて毎週遊んでる彼女が違つんだ」

「……その年で女たらしか、将来が心配だな」

「俺に似ていい男すぎるだけだよ。紳士的で顔も良いし、チカちゃんもつっかり惚れちゃうだろうな」

それは多分無いだろう。長谷川はともかく彼の女房は美人なので顔はそれなりに良いかも知れないが、相手はあのチカだ。

「今あり得ないって思ったな」

「だから何だ」

「そう言う慢心が駄目なんだよお前は。4年前だつて、余裕ぶつこいてたからキスのひとつも出来ずにチカちゃんは……」

思わず眉をひそめれば、長谷川が慌てた様子で後退した。

「そんな怖い顔するなよ。お前無駄に目力あるんだから」

そんな顔をしているつもりはなかったが、確かに少し眉間に皺が入りすぎていたかも知れない。

「ともかく、今度はさっさとプロポーズしろよ！ 今度手放したら、お前絶対前以上に荒れると思つんだよ」

「荒れてない」

その顔でよく言うと言つと苦笑して、長谷川は逃げるように自分の机へと戻つていった。

それに軽く睨みつけてから、俺は長谷川が出したままになっているパイプ椅子に目を向ける。

座る者のいない椅子は酷く邪魔で、いい加減倉庫に片づけたい。

そう思いつつも、「めんどくさい」と椅子から目をそらした自分が何より腹立たしい。

「プロポーズもなにも、相手は幼稚園児だぞ」

思わず呟いて、そしてそんな自分に更に腹が立つ。
あいつのことを考えるたびに、俺はいつも腹を立てている気がする。

我ながらそこまで邪険にしなくても思うのだが、自分の意志とは関係なく、チカの事を考えると愛おしさとは真逆の感情が出るのは前からだ。

そしてその所為で、酷い後悔をしたこともある。けれどそれでもまだ、俺は自分の感情が上手く扱えない。

まるで自分がもう一人いて、チカのことを拒もうと必死になっている。そんなことを時々思うほど、俺の心はチカによって掻き回されている。

それはとても不快で、チカごと捨ててしまいたいと思ったこともある。けれどチカの座る椅子すら片づけられない俺には到底無理な話だろう。

拒むことも出来ず、不快感を消すことも出来ない。

その間で上手く立ち回る方法があればきっとチカを傷つけずにすむのに、俺はそのやり方すら今だわからない。

もし俺に記憶があったらこんな事にはならなかったのだろうか。

なんてガラにもないことを思ってしまった自分にまたしても腹が立ち、俺は堂々巡りの考えに頭を抱えた。

片づけられないパイプ椅子（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

秘密の場所と呪いの秘密

「ここは俺の秘密の場所なんだ。園児も口々に来ないから普通に喋っても大丈夫だよ」

そう言うタカシ君に連れてこられたのは、体育館の裏にある大きな木の根本である。大きいと言っても樹齢何百年もあるような物ではないが、根本の地面がくぼんでおり、小さな子供なら隠れられるような穴が居ているのだ。

「ほらおいで」

と紳士的に私を穴の中に座らせてくれる彼は、やはり4歳児の風格ではない。

「そんな警戒しないでよ。別にとって食おうってわけじゃない」

何て台詞を4歳児に言われるとは思っていなかった私は、自分の隣に腰を下ろすタカシ君をしげしげと見てしまう。

「あなたも前世を覚えてるのよね」

「そうだよ。それに境遇もかなり似てる」

「境遇？」

「僕は悲恋57回目」

思わず息をのんだが、タカシ君は笑顔のままだった。

「恋を奪う呪いって結構メジャーなんだよ。だから、同じ境遇の奴は沢山いる」

そしてタカシ君が口にしたのは、同じクラスの園児達の名前だった。

「私、全然知らなかった」

「でも君のことはみんな知ってるよ。357回なんて凄い記録だし」

「そっそっかなあ」

褒められた気がして思わずにやけてしまった。いかんいかん。

「そうだよ。だからずっと会いたいと思ってたんだ」

そう言っただけでいい頂けるのありがたい。

ありがたいけれども、さり気なく腰に回された腕は凄く気になつた。

どうやらタカシ君はスキンシップが好きらしい。そう言えばお絵かきの時間も、複数の女の子の頭を撫でたり肩を抱いたりしていた。「チカちゃんのこととは、親父から色々きいてたんだ。だから是非慰めてあげたいなって」

「慰める？」

「無理しなくて良い。一人でずっと辛かったらどう？」

更に詰まる距離。そして腰に回された腕にこもる力強さに、私は思わず悲鳴を上げかけた。

「たつ確かに幼稚園に放り込まれたのは悲しいけど。でもやっぱり、私には先生がいるし、人妻だし、こういうふれ合いはダメだよ」

先ほどの計画を棚に上げ、私は取り乱してしまった。

外見はまだ子供だが、タカシ君のスキンシップは情熱的すぎるのだ。その上隙が無く、いつの間にか逃げ道もふさがれている。

「大丈夫、僕は君を見捨てたりはしない」

「かつ格好いい台詞だけど、そう言うのは別の人に言いなよ。それにさつきも言ったけど、私には先生がいるし。っていうか先生しかないし」

途端に、タカシ君は酷く切なげな顔をした。それも様になる可愛らしい顔をしているが、だからといって抱きしめられたくはない。

「可哀想に、まだ恋人のことが忘れられないんだね」

「忘れるも何も、先生と私は恋人同士だから！ だから腕を放して！」

暴れる私に、タカシ君が今更のように眉を寄せる。

「もしかしてチカちゃん気付いてないの？」

「何をよ」

「チカちゃんの呪い、もうとけてるんだよ」

「えっ！ それってまさか私もう先生と……！」

思わずガッツポーズをしようとしたが、その腕をタカシ君がギュ

ツと掴んだ

「やっぱり、チカちゃんは知らないんだね」

「だから何の話よ」

「てつきり無駄を承知でアタックしている物かと思ってたんだ。そうか、知らないからあんな無謀なことができたのか……」

さつきからどうも話が噛み合わない。その上彼の発言はあまりに失礼だ。

ここは多少手荒な手に出ても致し方あるまい。

そう思っただけで彼の体を突き飛ばそうとしたとき、タカシ君の口からあまりにも突然すぎる告白をされた。

「残念だけど、君の恋人はもう君を好きじゃない。呪いがつけたのは、その所為だよ」

彼をはね除けようとした腕が、中途半端なところで止まってしまった。

その上タカシ君があまりにも真剣な顔をしたので、私はただただ動揺することしかできなかった。

「シヨックかも知れないけど君のために言うよ」

そう前置きされたときも、彼から視線をそらすことしかできなかった。

「あの呪いは愛の力では絶対にとくことが出来ないんだ。どちらかが呪いに負けを認めて、愛を諦めない限りはね」

「でも私は諦めてない」

ようやく喉から零れた声は自分でもビックリするくらい細かい物だった。

それを聞いたタカシ君は残念だと繰り返して、私の頭を撫でる。

「君が諦めて無くても、君の恋人は違うんだ。親父からきいたけど、君の恋人は前世の記憶がないんだらう？」

小さく頷くと、タカシ君が大きなため息をつく。

「記憶がないことが何よりの証拠だ。愛を諦めると、それまでの記憶を全て失う。そうしないと新しい人生に進めないからね」

その言葉を否定したかったが、どこか辛そうに歪んだタカシ君の顔がそれを止めた。

「俺の彼女もそうだったんだ。ヒグマ組の南先生なんだけど、毎日会ってるのに全然気付いてくれない」

それが正しいなら先生は……、彼は私を愛していないと言うことになる。

でもそんなはずがない、そうだったら私を家に置いてくれるはずがない。

先生は違う。ただなにか違う理由で、すっかり忘れてるだけに決まっている。

そう宣言しようとしたのに、口から零れたのは弱気な質問だけだった。

「記憶を無くすのも、呪いが起こす障害の一部って事はないの？」

「それはないよ。今まで前世の記憶を持つ人に沢山会ってきたけど、例外はいなかった」

「でもほら、私の記憶はあるし」

「それを言うなら俺もだろ？」

言葉を返せずにいると、タカシ君が私の肩を優しく叩く。

「けど安心して、呪いが消えたって事は恋が出来るって事だ。普通にキスしたりデートしたり結婚したりもね」

「でも、先生じゃなきゃ嫌なの」

「気持ちわかるけど、君もきつとすぐ慣れる。それにどうしても辛いなら負けを認めればいい、そうすれば全てを忘れられる」

「先生を忘れるなんて無理」

「でも片方だけ記憶があるのも、辛いもんだよ」

タカシ君は笑った。けれどその笑いはどこか自虐的で、見ていてとても辛かった。

そのとき、遠くから私達を呼ぶ南先生の声が聞こえてきた。

二人で木の根本から出れば、少し怒ったような先生の顔が見える。「先生ごめんなさい」

そう言つて駆け出したタカシ君を待ちわびるかのように、先生が彼の体をしゃがんで抱きとめる。

「もう、心配かけないでね」

「うん、ごめんね」

そう言つて、タカシ君は先生の頬に可愛らしい口づけをした。

先生は驚いたが子供のイタズラだと思つたのか、優しく怒つただけだ。

「タカシ君はおませさんね」

「先生にだけだよ」

そう微笑んだ笑顔は大人びていて南先生が僅かにハツとする。けれどその言葉の意味を、南先生が理解することは永遠にないのだ。

そして二人のやり取りに、私は理解してしまった。

私と先生は、もう運命の相手ではない。そしてそれを選んだのは、他ならぬ先生なのだ。

秘密の場所と呪いの秘密（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

笑顔のない夜

どうやら、幼稚園に入れたのは失敗だったらしい。

迎えに来た俺に笑顔ひとつ見せないチカに、俺はそう悟った。

「チカちゃん少し疲れちゃったみたいなんです。昼間は元気だったんですけど、夕方くらいから静かになっちゃって」

そう言って説明してくれる担当の保育士から話を聞きつつ、俺はチカを抱き上げる。

「帰ろう」

いつもなら抱き上げただけで大興奮するところだが、チカは静かに頷いただけだった。

その後も一言も喋らず、家についてもチカは静かなままだった。

夕飯の支度をしつつ様子を見たが、やはり元気を取り戻す様子はない。

チカの好物のハンバーグを焼いてはいるが、それくらいで機嫌が直るようには思えず、俺は料理の手を止めてチカの側に座った。

「幼稚園、どうだった？」

そんなことは見ればわかる。にもかかわらず、そんな当たり障りのないことしか言えない自分が情けなかった。

「あんまり、楽しくなかったか？」

尋ねると、チカが俺の手をギュッと握る。

「チカ？」

「大丈夫、ちよつと疲れちゃっただけです」

そう言うチカの顔は明らかに無理をしていた。けれどその理由を聞き出す勇気が持てず、俺はただただチカの頭を撫でることしかできなかつた。

「今日、早く寝ても良いですか？」

「飯はどうする？」

「やめときます」

そう言って布団の用意をしようとするチカをもう一度座らせ、俺は自分の寝室にチカの布団をひいた。

「私の布団、こっちはじゃないですよ」

「俺が飯喰ってる横じゃ寝づらいだろう」

念のため、チカが潜り込んでも良いように並べて俺の布団を敷くと、何故だかチカは泣きそうな顔で俺の足に抱きついた。

「おい、どうした」

「私、もっと4歳児らしくした方が良いですか？」

やはり幼稚園は辛かったのだらう。これはちゃんと、チカと話し合った方が良くも知れない。

「その話は明日しよう。だから今日は休め」

俺の言葉に、チカは泣きながら頷いた。

それから俺は、台所に戻り出来たばかりのハンバーグに目を向ける。

食べて貰えなかった料理を見ていると酷く心がざわついた。いっそ捨ててしまおうかとも思ったが、やはり俺にはできない。

「チカ」

名を呼ぶと、着替えようとしていたチカは少し驚いた顔で俺を見上げた。

「明日の朝は、チーズハンバーグと目玉焼きハンバーグどっちが良い？」

ただそれだけのことなのに、またしてもチカは涙ぐんでいた。

「目玉焼きがいいです」

「朝になって、やっぱりチーズが良いとか言うなよ」

少しで気を楽しにしてやろうと冗談を口にしてはみたが、やはりガラにもないことはすべきではない。

結局最後までチカ的笑顔は引きつったままで、俺と目を合わせることもなかった。

決断と勘違いの代償

時計の音と先生の寢息を聞きながら、私は静かに布団の抜け出した。

時間はよく見えないけれど、たぶん日付は変わっている頃だろう。布団を抜け出し、それから私は隣で寝ている先生の側に膝を抱えて座る。

こうして眺める先生の寝顔は、私の宝物だった。

もちろん暗くてよくは見えない。でもこうして先生の寢息を聞きながら、おぼろげな輪郭を眺めるのが好きだった。

けれどそうして彼の寝顔を眺める資格は、私にはもう無い。

いや、もうずっと前から資格など無かったのだ。

『残念だけど、君の恋人はもう君を好きじゃない』

タカシ君の言葉を思い出しながら、私は先生の寝顔から目を背けた。

言われてみれば今までのどの人生よりも、先生は私に冷たかった。けれど私はその意味をちゃんと考えたことがなかった。

今回だけでなく、私はもうずっと前から、彼の言葉と心を蔑ろにしてきたのかもしれない。

普通よりも何倍も辛い恋に何度も何度も付き合わせてしまったのに、いつしかそれを当たり前の事のように思っていたのだ。

嫌われて当然だ。好きと言いながら、私は先生の気持ちをちゃんと考えたことがなかったのだから。

泣きそうになるのをぐっところえて、私は前に自分で書いた絵本を棚から抜き出す。

先生に無理を言ってひもで閉じてもらったそれを静かにばらし、その中の一枚を私は先生の枕元に置いた。

『私のことは忘れてください。そしてあなたは幸せになって下さい』
そこに書かれている台詞は、かつて私が彼に言った物だ。

あのかきはあんなにも簡単に言えたのに、それを今一度口に出すのは酷く辛い。だから私はそれを枕元に置いたのだ。

今思えば、本当はもっと早くに言うべきだったのだろう。むしろ出会うたびに言うべきだったのだ。

彼を愛しているなら、彼の幸せを願うなら、いつでも辞めて良いのだと言うべきだったのだ。

けれどわかっていてもそれを言うのは辛くて、それがきつと彼を苦しめたのだろう。

私は涙をこらえながら、もう一度先生の側に戻る。

言うべき言葉を告げられぬなら、私がすべき事はひとつだ。

先生は私が子供らしく在ることを望んでいる。恋人のように接する態度を嫌っている。そして何より、私との愛に疲れ果てている。

ならば私がすべき事は、自分もまた呪いに負けを認め、今度こそ本当に彼を解放することだ。

そうすれば先生が嫌いな私は消え、彼の望むただの4歳児になることが出来る。

「先生ごめんね」

嫌いだと言われた言葉をちゃんと真に受けなくて。

無いはずの愛に縋り付いて。

その上一人死を繰り返した私の面倒までみさせて。

「行くところないからもう少し迷惑かけちゃうけど、先生が嫌いな私はちゃんといなくなるから」

そうすればきつと、先生は楽になれる。

だから私は必死に念じた。自分は負けたのだと。

私は呪いに必死に語りかけた。もう開放して欲しいと。けれど、いつまでたっても忘却は訪れなかった。

先生を見ないように目を閉じて、泣きながら何度も何度も負けを宣言したのに、膨大な記憶も数え切れないほどの愛も上手く消えてくれない。

この方法ではないのだろうか。何かすべき事があるのだろうか。

そう必死に考えて、ありとあらゆる言葉で負けを宣言したのに、やっぱり終わりは訪れなかった。

「いつまで、泣いてるつもりだ」

その代わり、静かに降りてきたのは先生の声だ。

涙を拭きながら目を開けると、先生が困った顔でこっちを見ている。

「先生……わた……し……」

「やっぱりチーズが良くなったのか？」

全然違う。そんなことどうでも良い。そう思いつつ、私は目玉焼きで良いと答えていた。

場違いなその言葉で、私は今更のように気付く。

諦めると良いながら、私は何一つ手放していないのだと。

「先生、今すぐ大嫌いって言うってください」

「どうした突然」

「いいから！」

私の泣き声に、先生は静かに告げた。

「大嫌いだ」

口で言われたのに、そして諦めると心の中で叫んだのに、私の想いは消えなかった。

「もう一回」

「大嫌いだ」

「もっと憎しみを込めて」

「大嫌いだ」

「もっと心の底から」

「お前の事なんて、大嫌いだ」

嫌いだと先生は何度も繰り返した。

でもどういうわけだか「好きだ」と言われているような気までしてきた。

たぶん、長い間先生の罵声を聞き続けた弊害だろう。

そしてそれを、愛の言葉だの照れ隠しだのと勘違いしすぎたのも

いけなかったのだろう。

「お前が大嫌いだ」

言って、先生がゆっくりと起きあがった。

そして彼は腕を伸ばし、私を抱き寄せた。

優しくされたらまた期待してしまう。忘れられなくなってしまふ。

泣きながら必死に抵抗しようとしたが、先生の腕に4歳児が叶うわけがない。

「チカ」

その上耳元で名前を呼ばれ、私のなかで、彼への愛しさが高まってしまった。

「私、明日も先生のご飯が食べたい……」

諦めるのは困難なのに、好きな気持ちはいとも簡単に歯止めを失う。

「目玉焼きが好きな私のまま……、大好きな先生の朝ご飯が食べた……」

気がつけば、先生の胸に縋り付いてわんわん泣いてしまっていた。

その上、何があったのかと尋ねる先生に、今日あったことを洗いざらい打ち明けてしまっていた。

本当に彼を思うなら言うべきではない。そうしなければ先に進もうとした彼の足かせになってしまう。

それがわかっていたのに、卑しい私は自分の言葉で先生が罪悪感を感じれば良いと一瞬思ったのだ。

その罪悪感が絆に変われば良いと。

歪な形でもいいから、私と彼を繋いで欲しいと思ってしまったのだ。

「……ごめんなさい」

最後の理性で涙の間に謝罪を挟むと、先生が優しく私を抱きしめてくれた。

「謝らなくて良い」

その口調は大嫌いと言われたときと同じ物なのに、まるで大切な

人に語りかけるような暖かさに満ちていた。

決断と勘違いの代償（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

先生と私の朝

朝目がさめると、先生はそこにいなかった。

それを寂しいと思ってしまう瞬間、私はまた後悔する。

結局、私は何一つ諦めきれていない。

「起きたのか？」

突然響いたその声に驚いていると、先生が寢室を覗きに来る。

「おはようございます」

我ながら他人行儀な声だと思ったが、昨日のあの失態の後でどう接したらいいかわからない。

「メシできたけど食べるか？」

「あ、いや…食欲は……」

無ければ格好が付くのに、私の腹は何とも情けない音を立てている。

「あります」

「じゃあ食べ」

渋々居間に向かえば、先生の目玉焼きハンバーグが私を待っていた。

それを見た瞬間目頭が熱くなったが、残念なことにそろそろ幼稚園に行く時間である。

最後の食事になるかも知れないのに、残すのはしのびない。

だから今日だけはゆっくり朝ご飯を食べたいと考えていると、先生に先読みされた。

「今日は幼稚園休め。俺も午前中は授業がないから、昼前に行くことにした」

それはつまり、色々とお話をすると言っただろう。

昨日あれだけ嫌いを連呼させておきながら、今更のように先生との別れが忍びなくなってしまうた私は、思わず視線を下げた。

けれどすぐさま、先生の手が私の顎を持ち上げる。

「それで、俺に言う事あるだろう？」

ある。ここまで来たなら言わねばならない言葉がある。

視界の隅に置かれた絵本をちらりと見て、そして私は先生に視線を戻し、静かに息を吸った。

「好きです」

なのに、出てきたのは全く違う言葉だった。

「いや、あのそうじゃなくて、あの……私のことは忘れてください。そしてあなたは幸せになって下さい！」

後半若干棒読みになったがとりあえずミッションは成功である。

よし、今日は何とか言えた。

「そうじゃないだろう」

けれど先生は満足しない。

「ごめんなさい」

「そうじゃない」

「ありがとうございます」

「違う」

「……いただきます」

途端に先生が頭を抱えた。

「俺に怒ってるんじゃないのかお前は」

その発想はなかった。むしろどうしてそう言う発想になるのかわからなかった。

と言う顔をしていたら先生も私の思いに薄々気付いたのだろう。

彼は酷くばつの悪そうな顔で、私の顎から指を放す。

「お前を見捨てた俺を、お前は責めないのか」

「責めるわけ無いじゃないですか」

「でも昨日泣いていただろう。俺がお前のことを忘れたのは、お前を見捨てたからだって」

「だってあれは先生がした事じゃないし。それに普通だったら、100回に到達する前に挫折しちゃうと思うし、むしろそれだけ付き合ってくれた事に感謝って言うか、ごめんなさいって言うか」

むしろそれでも諦めきれなくてごめんなさい。

そう言って頭を下げると、先生が昨晚のように私を抱き寄せた。そのまま腕の中に閉じこめられると凄くホツとする。やっぱりこの温もりを手放したくないと強く強く思ってしまう。

「でも私頑張ります。時間はかかるかも知れないけど、先生のことちゃんと諦めて、4歳児らしい4歳児になります」

だからもう少しだけ、あと少しだけで良いからこうしていたい。

「先生好みの女、じゃなくて幼児になりますから」

「何度も言ってるが、俺は幼児には興味はない」

「でも、こんな4歳児嫌でしょう？ だから幼稚園にも入れたんでしょう？」

「むしろ俺はガキは嫌いだ。お前じゃなかったら、家に何て置いてない」

その言葉だけでもう凄く嬉しかった。けれど先生は、ありがとうと言いかけた私の口を塞ぐ。

「今日はちゃんと誤魔化さずにいう、だからもう少し聞け」

こくと頷けば、先生が眉間に皺を寄せつつ私の顔をのぞき込んだ。

「それにもし、お前をずっと家に置いておけるなら多分俺はそうしてる。幼稚園に入れるくらいなら、あのパイプ椅子に座っていて欲しいとも思ってる。もちろん、それは今のお前にだ」

そう言う先生は、未だかつて無いほど真っ赤な顔をしていた。だから、私は気付いた。

「先生、もしかして恋人は腕の中に閉じこめておきたいタイプですか？」

「何だそれは」

「好きな人はずっと抱きしめていたいタイプですか？ 外に出したくないタイプですか？ 鎖でいやらしく縛り付けておきたいタイプですか？」

「後半は頷けないが、好きな相手を独占したい気持ちは普通あるだ

るう」

好きという言葉に、私は思わず先生の顔を穴が開くほど見つめた。「じゃあ私のこと、ずっと抱きしめていたとか思ってたんですか？」

尋ねた途端顔を背けられた。

「凶星だ。絶対凶星だ。今まで勘違いし続けてきた私でもわかる。これは絶対凶星だ。」

「じゃあ何で幼稚園なんかに入れたんですか！」

「お前が無理してるからだ。俺にあわせようと色々我慢して、どんどん子供らしさが少なくなってるから」

「それが辛いなんて言ってますん！」

「わかってる。ただそれを、俺が見てられなかったただけだ」

「やっぱり、本当は幼女らしい幼女が好きなんじゃ……」

「違っつて何度言わせんだお前！俺はただ、お前に無理して欲しくねえんだよ！」

お菓子を我慢したり、おもちゃを我慢したり、寂しさを隠したり。そう言う小さな我慢がいつしか増えていくのが辛いと、先生は怒りながらも教えてくれた。

我慢が増えることを辛いと思ったことはなかった。

「ただと言われれば、私は先生への想い以外のことを二の次にしすぎていたのかも知れない。」

「先生の愛だけあればよかったです」

「わかってる。でもそれだけが人生じゃないだろう」

「でも一番大切だから。けどそれがないのが辛くて、どうしても欲しくて」

「ならいくらでもくれてやる。だから、お前はもっと他の物も大事にしる。お前が積み木で遊んでも、菓子をねだっても、幼稚園でどろんこになっても、嫌いになつたりはしない」

「あと、ピアニカも吹くの好きです」

「ピアニカでもリコーダーでも好きなだけ吹け」

昨日あれだけ泣いたのに、またしても私の目からは涙があふれ出
した。

「先生優しすぎます」

「そこが好きだってお前が言ったんだろっ」

言ったけど、そのときよりも今の方がずっと優しい。

「先生、大好きです」

「知ってる」

「前よりずっと好きです」

「わかってる」

「だから、もう一回チャンスを下さい」

「それはこっちの台詞だろっ」

私の涙を拭って、そして先生はどこかふっきれた顔で私の唇を奪
った。

「お前がでかくなったらプロポーズをやり直す。だからそれまで、
ずっと俺を好きでいろ」

「先生、いつにもまして大胆ですね」

「ぐだぐだしてる間に、お前が手間のかかる幼児になったら嫌だか
らな」

「私はたぶんずっと私のままですよ。しつこさだけが取り柄ですか
ら」

そう言って笑うと、今度の人生では他の取り柄も作れと優しくこ
づかれた。

それから私は先生の腕の中に捕まったまま、目玉焼きの乗ったハ
ンバーグを食べた。

先生のご飯はやっぱり美味しい。でも特に今日は美味しくて、私
は幸せな気分でご飯を3杯もおかわりした。

欲しかった物はすぐ側に

「先生！ 未来のお嫁さんがお弁当を持ってきましたよ！」
そう言つて職員室に飛び込んだのに、先生はいなかった。

「チカ、お前授業時間も忘れたのか？」

先生の代わりに出迎えてくれたのは、色々な意味でお世話になった長谷川先生だ。

「そうか、まだ授業中なんですね」

職員室には長谷川先生と数人の先生が居るだけで、とても静かだった。

「せっかく先生に会えると思つてきたのに」

「じゃあそこで待つてればいいだろ。そろそろ昼休みなんだし」

と言つてパイプ椅子を広げてくれる長谷川先生。

「つていうかお前、幼稚園どうした」

「今日休みですよ。遠足の振り替えて」

「マジかよ！ 俺なんにも聞いてないぞ」

知つてたら早く帰つて息子とキャッチボールしたかつたという長谷川先生。

でもきつと、タカシ君は家にはいないだろう。

何だかんだ言つてまだ南先生が好きな彼は、「とにかく押しして押しして押しまくるんですよ」という大先輩のアドバイスを信じ、休日も先生の家に押しかけているはずだ。

「でも何もきいてないつてことは、もしかして先生奥さんから嫌われてるんじゃない？」

「俺の話は良いだろ。つーかお前、真田とはどうなんだよ」

「ラブラブですよ！ 大きくなつたら結婚してくれるつて言われませんでした」

「ほー」

と言つた長谷川先生の反応はあまり芳しくない。これは信じてない

な。

「本当なのに」

「いや、別に嘘だと思ってたわけじゃない。ただ、あいつもついに決心したんだなあ」と

どういう意味かと尋ねると、先生の机の引き出しを開けると長谷川先生が言う。

言われるがまま指定された引き出しを開ければ、そこには数冊の参考書と小さな箱が入っていた。

小箱を見た瞬間、私のテンションが上がったのは言うまでもない。

「こっこれは！」

「開けてみる」

と言われるまでもなく開けると、そこには指輪が入っている。

「まさか、まさか私に！」

「そのまさかだよ。っていつても、前のお前に真田が買った物だけだな」

正直信じられなかった。

私は亡くなる数時間前まで「結婚しましょう」と言い続けてきたが、あのころの先生は嫌そうな顔を崩したことがなかったのだ。

「卒業式の日に渡すつもりだったらしいぞ。まあその前にお前はぼつくり死んじまったが」

それが本当なら死んでいる場合ではなかった。これは悔しい。下手な障害で引き裂かれるよりよっぽど悔しい。

「死ななきゃ良かった」

「全くだよ。お前が死んだお陰で色々大変だったんだぞ、こいつすごい荒れてさ」

「まさかそんな」

「そのまさかだよ。何かもう後追いつけるんじゃないかってくらい凹んでたし、酷いやつれようだったから校長が無理矢理休暇取らせたくらいだ」

それが本当だったとしたら、先生には酷いことをした。

「だから今度はうつかり死ぬなよ」

「大丈夫です、もう呪いはないそうなので」

代わりに愛の奇跡もなくなったが、私と先生の間には新しい絆がちゃんと芽生えている。

「だから長谷川先生、結婚式には必ず来てくださいね！」

そう言っただけ微笑んでいると、職員室に懐かしいチャイムの音色が響き渡る。

彼が来るまであと少し。

私は受け取るはずだったぶかぶかの指輪をはめて、愛しい先生を待つ。

多分私の姿を見たら嫌な顔をするだろうが、先生の眉間の皺は愛情の証だと気付いた今、前よりずっと先生への愛おしさは増している。

彼が来たら思いきり抱きついて愛を囁こう。そう決意して、私は職員室のドアを笑顔で眺めた。

359 回目のプロポーズ【END】

欲しかった物はすぐ側に（後書き）

11/18 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

頭のおかしい教え子

「屋上にしましょう。それが良いです、素敵です、絶対屋上です！」
「……何がだ」

意味不明な発言を繰り返す問題児の、いつも以上に意味不明な発言に捕まったのは、卒業式を間近に控えた日のことだ。

授業もほとんど無いというのに、「先生に会いたいから」なんてふざけた理由で毎日登校してくるこの少女の名前は小林千佳。

俺を運命の相手だといつてはばからない、頭のおかしい教え子である。

「何がってプロポーズの場所ですよ！ 先生がこうやって跪いて、私に指輪を渡す場所です」

思わず彼女を殴った俺を誰が責められようか。何せこいつと俺は恋人でも何でもないのだ。

「何でいきなり結婚することになってる」

「いきなりじゃないです、私達はもう357回も……」

「もういい、その話は耳タコだ」

「じゃあ、卒業式が終わったら屋上で待ってます」

「待ちぼうけだな」

「えー」

「卒業式が終わったら、さっさと帰りたい」

「じゃあ先生の家でも良いです」

「じゃあって何だよ」

「ずっと待ってたんですよ、最後の障害が無くなるのをずっと！」

そう言っただけで近寄ってきた千佳は、ここが職員室だというのも忘れて俺の体に抱きついてくる。

その温もりはどこか緊張している自分に気付き、俺は思わず舌打ちをした。

「でもまだ未成年だろ」

「大丈夫です、先生とエッチしても誰にも言いません!」

「と云うことを現在進行形で職員室で喋っているお前を信じられると?」

「この先生達も口が堅いと思っんです」

「そう言っ問題じゃない」

千佳の体を離すと、何故だか周りからがっかりしたような視線を感じる。

何だよその「またダメだったか」みたいな目は。お前等全員ここは千佳を叱るところだろう。

「ともかくプロポーズ何てしない」

「します、先生は絶対します!」

「何でそう言いきれる!」

「愛」

思わず頭を叩いた。

「だって先生、もし私が居なくなったら絶対寂しいですよ!」

「そんなわけねえだろ!」

「あります! だから絶対、卒業式までに指輪とかうっかり買っちやいます!」

絶対そうだという千佳に、俺はあり得ないと鼻で笑った。

現実になつたうっかり

「やっぱり買ったな」

「……何のことだ」

「チカちゃんのことあんだけ鼻で笑つてたのに、やっぱり買ったな」

「……だから何のことだ」

「今、お前が机の引き出しにこっそり隠した小箱の中身のことだよ、誰にも見られないように注意していたはずが、よりにもよって友人の長谷川はバツチリ見ていたらしい。肝心なところで詰め甘い自分が、本当に嫌になる。」

「これは、友達へのプレゼントだ」

「宝飾店の名前が見えたぞ。それにお前、友達全員男だろう」

言葉を詰まらせていると、長谷川が楽しそうに俺を見る。

「寂しくなってきたか？」

「そう言うんじゃない」

「じゃあ焦つたんだろ。最近チカちゃん大人気だもんなあ」

長谷川の言葉に顔をしかめてしまったのは、先日うっかり目撃したとある現場が頭に浮かんだからだ。

この時期は玉砕覚悟で告白してくる女子生徒が多く、俺はそれから逃れるために屋上の隅でたばこを吸っていた。

そこに、あるう事が現れたのはチカと見知らぬ男子生徒である。

ここは教師以外立ち入り禁止だと告げようと思つたのに、何故だか物陰から出ることが出来なかった。

「千佳先輩が先生を好きなのは知っています。でもどうしても言いたかつたんです、好きだって！」

と、始まつた告白劇をそのまま見る羽目になり、俺は何とも嫌な気分になつた。

少し前から、千佳が告白責めにあつていているという噂は聞いていた。俺が未だに千佳を冷たくあしらつているのを見た一部男子が、こ

れ幸いと突撃を開始したというのである。

「生徒同士、大いに結構じゃないか」

「とか言って指輪を買ったのは誰だよ」

もちろん俺だが、これは本意ではない。

あの告白を目撃したあと、何故だかむしゃくしゃしてしまった俺は、うっかり酒に走ってしまったのだ。

弱い方ではないが、どういう訳だがその日は浴びるように飲んでしまい、あつという間に意識を喪失。

そして次の瞬間、俺はこの箱を持って家のベッドで寝ていたのである。

だからつまり、これは魔がさしたただけだ。こんな物、あいつだつて受け取りたくないに決まっている。

「いつそ今あげて来いよ。保険は大切だぞ」

「だからこれは……」

「358回目も悲恋になったら嫌だろ？」

こいつまでその話を信じているのかと腹が立ったが、言い訳を重ねるだけ相手に言質を取られるのは明白なので、俺は黙って席を立った。

「チカちゃんの所か？」

「五月蠅い」

と言いつつ、気がつけばあの小箱をスーツのポケットに入れた自分に、一番腹が立った。

指輪の行方

「あ、先生！」

別に探しているわけではなかったが、千佳は簡単に見つかった。

「どうやら帰るところらしく、下駄箱からローファーを出している。」

「まさかお見送りですか！」

「んなわけねえんだろ」

「照れなくて良いですよ」

照れてないと怒れば、千佳が嬉しそうに微笑む。

「明日、卒業式ですね」

「そうだな」

「私凄く楽しみです。ついに先生と、ぐへへ」

可愛らしさの欠片もないその笑い方に呆れているはずなのに、何故だか右手が千佳の頭を乱暴に撫でていた。

その上屋上での告白シーンを思い出してしまい、反論する声に僅かな僻みが入ってしまった。

「俺じゃなくても、告白なんていくらでも貰えるだろう」

「先生じゃなきゃダメなんです」

拗ねたような表情にホッとして、その上うつかり可愛いとってしまった自分に、またしても腹が立ってきた。

にもかかわらず、千佳の頭から手をはなせずにいる俺は、一体何がやりたいのか。

「本当に男の趣味が悪いな」

「そんな事無いです。先生は凄く素敵で優しく、理想の旦那様です」

「旦那じゃねえよ」

「きつとそうなります。私、頑張って素敵な奥さんになりますから」
「その前に恋人じゃねえのか？」

思わず突っ込めば、千佳は今更のように驚いた顔をする。

「お前まさか、俺の恋人のつもりだったのか？」

「だっていつも一緒にいるし」

「それはお前が勝手にくつついてるだけだろう」

「けどこんなに好きだし」

「お前はな」

そう言うと、千佳は愕然とした表情でうなだれた。

「言われてみると、デートもした事無い」

強いて言えば修学旅行、いやあれはまた別だ。

とグダグダ考えている千佳があまりにもおかしくて、だからつい
うっかり俺は言ってしまった。

「結婚より、まずは付き合いからだろう」

「まずって事は、お付き合いはしてくれませんか！」

そう言う切り返しだけは無駄に早い。その上答えに困っている俺
に、チカが思い切り飛びついた。

「じゃあまずは恋人になりましょう」

「何を勝手に……」

「あ、恋人になるんだったら私の方から言ってもいいですよね？」

明日までに、寝ないで『付き合ってください』っていう練習してき
ますんで！」

普段もつと凄いことを言っているだろうと突っ込みたかったが、
爆走する千佳はもう止められない。

「頑張ります！」

と言う見当違いの宣言を残し、彼女は鞆片手に下駄箱を飛び出し
た。

「本当にあいつは……」

呆れているはずなのに、顔が熱くなるのが止められない。

こんなのは俺らしくない。そう思っているのに、気がつけばポケ
ットのの中の小箱を、俺は千佳の下駄箱の奥に突っ込んでいた。

最後の最後まで押されっぱなしなのは、俺のガラじゃない。

なんてふざけた男心が、俺の右腕を突き動かしていたのだ。

それなら自分の口で言えと思うが、それはそれで負けた気がして
凄く嫌なのだ。

我ながら素直じゃない。

そう思っている時点で彼女への思いを自覚したも同然だと気がつき、
俺は更に腹が立った。

いつそ誰かが見つけて盗んで欲しい。そうすればきっと、今度こそ
そ馬鹿みたいな気は起こさないうですむ。

「あいつが、絶対見つけませんように」

俺は情けない独り言を呟いて、下駄箱から離れた。

そしてその願いは見事叶い、指輪はそれからしばらくの間、下駄
箱の奥で眠り続けることになった。

そして時はたち

「おいチカ、そろそろメシだからその積み木片づける」

見下ろさなければ姿も見えない。

4年前と比べると驚くほど小さくなったその体に、俺はフライパン片手に声をかける。

「今日のお昼はなんですか？」

「焼きそば」

直後、軽い衝撃が足に響く。

「焼きそば大好きです」

だから作ったなどとはもちろん言えない。

俺は足に抱きついてきたチカに苦笑しつつ、俺はフライパンの中の焼きそばを皿に取り分ける。

「先生、多めが良いです！ 多めでお願いします！」

「うるせえなあホントに」

「大好物なんです」

そう言っただけからひょいと飛び降りた衝撃で、チカの胸元から小さなネックレスが零れる。

銀のチェーンネックレスの先にあるのは、彼女には大きい銀の指輪だ。

「ソースで汚れるから、それ外せ」

大切にしているという割に、身の丈に合っていないネックレスを料理に入れることはしばしばあり、最近では食事前に必ず外させている。

汚れると「大事な指輪が！」と馬鹿みたいに騒ぐからだ。そしてそれを磨くのが俺だからだ。

「これ、そろそろ指にはまりませんかねえ」

「どう考えてもまだ無理だろ」

っていうか、そんなに高い奴じゃないからはめる前に錆びるかも

な。

何気なくそう言つと、チカがこの世の終わりのような顔をした。

「先生がはじめて買つてくれた指輪なのに」

「それはうっかり死んだお前がわるい」

言いながら今の食卓に焼きそばを並べてふと、俺はあることに気付く。

「そう言えば、悲恋の呪いってお前が死ぬよりも前にとけてたんだよな」

「ええ」

「……じゃあ、お前何で死んだの？」

「何って事故ですよ」

「ただの事故？」

「私は呪いの所為だ思つてましたけど、今思うと事故なんでしょうねえただの」

「ちなみにどんな事故だったんだ？」

「あれ、知らないんですか？」

事故死とは聞いていたが、あのころは色々余裕が無くて、それ以上の情報を頭に入れられなかつたのだ。

「帰宅途中の事故、だったんだよな」

「はい。家に向かつてる途中でですね、ボールが当たっちゃったんですよね」

「は？」

「うちの側に野球場があるじゃないですか」

「あるな」

「そのホームランボールがね、当たっちゃいけないところにゴーンって」

そして次の瞬間、自分は赤ん坊になつていたらとチカは笑う。

「落ちてくるなあこつちに、と思ひながらついついぼーっとしちゃつて……。でもまさか死ぬなんて思わなくて」

そう言つて笑う彼女を見てみると、なんだか無性に腹が立ってき

た。

ボールに当たって死ぬのは馬鹿らしいが、それが呪いであればまだ理解できた。

しかしどう考えても、全ての原因はこいつの運の悪さと反射神経の鈍さだ。

そう思うと、彼女の死を馬鹿みたいに悲しんだ自分が、そしてそんな目に遭わせたチカに酷く腹が立つてくる。

「やっぱりお前最悪だな……」

「ボールが落ちてきたのは私の所為じゃありません！」

「いや、お前の運の悪さが原因だ」

「じゃあ厄よけとか行きますから！」

厄よけでどうこうなる問題ではない気がしたが、見捨てないでと縋り付くチカを落ち着かせるために、午後にも近くの寺につれてつてやると約束した。

「とりあえず今は焼きそば食べ。……喉に詰まらせないようにな」

「はい、沢山食べて頑張つて厄よけますー！」

「厄よけで頑張るのはお前じゃなくて神さまだろう」

と言つてはみた物の、焼きそばに夢中のチカはきいちゃいない。

仕方なく付けたままになっている指輪とネックレスを外してやり、俺はそれを握りしめた。

高価な物ではないが、やはり子供が持つにはあまりに不釣り合いだ。

取り上げたら泣くので持たせているが、指輪何かよりお守りでもクビにぶら下げていた方が、よっぽど釣り合いが取れる。

色気がないとチカは怒るだろうが、もしもまたボールが飛んできたとき、お守りの方がよっぽど役に立ちそうだ。

本気でこれをはめるつもりなら大事にしまっておく方が良いだろうし、今日は代わりに首から下げるお守りも買おう。

絶対不機嫌になるだろうが、俺も同じのを買えばお揃いだとか言つて気をよくするに決まっている。

なんだかんだでチカの扱いに慣れてきた自分にため息をつきつつ、俺は焼きそばを頬張るチカの頭を撫でた。

認めたくないが、ここにもう一度ボールが当たったら、多分俺は立ち直れない。

プロポーズの間で【END】

クリスマスのおねだり

『フレンチキス』

そう書かれた紙を、俺はチカの前でビリビリに破り捨てた。

「ああっ、サンタさんへのお手紙なのに！」

「何がサンタさんだ、そんな物はいねえってわかってるだろ！」

「いたいけな少女になんて夢のないことを！」

「お前が言うなお前が！」

そう言っただけで睨めば、俺の小さな恋人はふくれ面で破り捨てた紙を拾い上げる。

「じゃあコレ、先生がください。私の保護者なら、プレゼントをあげるべきです」

「プレゼントほしがるほどガキじゃねえだろ」

「私6歳児ですよ！ 普通だったらサンタさんだっけてきてくれる年ですよ！」

「中身はいい年の癖に」

「それ、一番傷つくって何度も言ってるじゃないですか！」

「だって事実だろ」

「人のことバカにしていますけど、先生だってもうジジイなんですからね！」

「ジジイでけっこうだ」

あえて素っ気ない返事をチカに返せば、彼女の小さな脳みそは、それ以上の反論を思いつけなかったらしい。

「先生のバカ！ バカバカバカバカ！」

子供のように泣き叫んで、チカはどこぞの猫型ロボットのように押入の中に引きこもってしまう。

けれど俺は慌てない。

チカが子供っぽい行動を取るようになってもうずいぶんになるし、喧嘩をする度押入に引きこもるのは彼女の十八番なのだ。

「ばか！」

と叫び声が響き、そして部屋には沈黙が戻った。

それから5分ほどぼんやりと過ごし、沈黙の向こうからかすかな寝息が聞こえ始めたタイミングで俺は静かに押入を開ける。

大人びたプレゼントを要求したとしても、チカはまだ子供だ。

泣いて喚けばコロッと電池が切れてしまう。これもチカの十八番の一つだ。

「ほんとバカだな……」

仕返しのようにそう呟いて、俺はチカを布団まで運んだ。

無邪気に眠るチカを見ていても、これにフレンチキスをしたいとは思わない。

思わないけれど、親子のような接し方が出来ていないことは自覚している。

チカがはじめてこの姿で現れたときから、俺は多分彼女を子供として見れていない。

丁度1年前、小さなチカが俺の前に現れたそのときから、俺は健全な高校教師の枠からけり出されてしまったのだろう。

枠の外に出ることを受け入れてしまったチカとの再会を思い出しながら、俺は一人ため息をついた。

久々の帰省と嵐の前触れ

「ガキができた」

兄貴からそう告白をされたのは、聖夜の始まりを告げる午前0時の鐘が鳴ったすぐ後のことだった。

場所は俺の実家の洗面所。ちなみに兄貴はサンタを思わせる真っ赤な服を着ている。

けれどその服は元から赤かったわけではない。3時間にも及ぶ親父との殴り合いの末、鼻や口からこぼれた血が彼をサンタに変身させたのである。

しかしそれに驚くことはない。拳を使った語り合いは我が家の十八番だ。

祖父が空手の師範代だった影響で、「男は拳で語り合え」という謎の家訓が未だに蔓延っているのが俺の実家なのだ。

むしろ武闘家なら闇雲に殴り合うなと言いたいが、とにかく頭に血が上るとすぐに「語り合い」が始まるのがウチの野郎どもなのである。

もちろんこれはウチの中でだけの話だが、乱闘が行きすぎて警察に通報され、親父と祖父が二日ほど帰ってこなかった事もあるくらい、我が家での激しい語り合いは日常茶飯事だ。

故に喧嘩の弱い兄貴が親父にボコボコにされるのはいつものことで、俺はいつものように濡れたタオルを兄貴に渡してやる。

「ここはおめでとうと言うべきか？」

「嫌味に聞こえるからやめてくれ」

「赤ん坊が生まれるならめでたいだろう。色々入り用なら多少出資してやっても良い」

皮肉ではなく本心からの言葉だった。多少腹立つこともあるが、俺はこの駄目な兄貴がそれなりに気に入っている。けれど兄貴の不幸は、俺の予想の遥か斜め上をいっていた。

「4つなんだ、その子」

「まさか、隠し子とかいうなよ」

冗談のつもりで尋ねたのに、兄貴は忌々しそうに顔をしかめる。その途端、兄貴の口元からぐらついていた前歯がぼろりと落ちた。どうやらこれは笑えない話らしい。

「俺の子じゃないんだ。サオリの、前付き合ってた女の子供」

「つきあってた？」

「いなくなっただんだ。ガキだけ置いて」

「押しつけられたって事か」

「……この家無駄に広いだろう？ だから金持ちだっと思ってたらしくて、ここに泊めた翌日『この子をお願いします』って書き置きとガキだけ置いて消えちまった」

ついでに俺のロレックスを盗まれたという兄貴に、俺は心底同情した。

子供を置いていかれたことにじゃなく、ロレックスにだ。

あれは親父が兄貴の成人の祝いに買った物で、もし盗まれたと知れば親父は烈火の如く怒り出すだろう。

たぶん今度は奥歯まで確実に折られる。

「なあ博文、お前子供とか欲しくないか？ よかつたらやるぞ、俺子育てとかむりだし」

「欲しくねえよ、嫁さんだっただまだなのに」

「当分作らないだろ？ お前まだあの子のこと引きずってるみたいだし」

以前酔った勢いで迷惑な生徒のことを兄貴に話してしまった事を、俺は酷く恨んだ。

よりにもよって、こいつの口からあいつのことを思い出したくはなかった。それもクリスマス晩に。

「援助ならしてやっても良いけど、協力できるのはそこまでだ」

「そんなこと言うなよ、お前子供が趣味なんだろ？ あの子可愛いし、自分好みに育てて好きかってすれば、お前も少しは気が紛れて

……」
直後、兄貴の前歯があと3本折れた。むろん、俺が殴り飛ばしたからである。

滅多にやらないが、俺だってこの家の男だ。そして兄貴よりは強い。

洗面台にしなだれかかるように倒れる兄貴を転がせば、やはり完全に伸びている。

前歯のない口元が何とも哀れでいい気味だと思ったが、予想より心は晴れなかった。

わざわざ実家まで帰ってきたのは、他ならぬこのバカ兄貴が親父に殺されるのを防ぐためだった。

そして俺は親父が鬼の形相で50インチのテレビを振りまわしている居間から、見事彼を救い出してやったのだ。

けれどよりにもよって助けた兄貴の口からあいつの話が出るなんて本当に最悪だ。

クリスマスなんてクソ喰らえと兄貴を踏み越え、俺はもう一度、こんな家に来るんじゃないやなかつたと舌打ちをした。

小さな侵入者

「あいつにガキが出来た」

兄貴を転がしたまま居間に戻れば、同じく赤い服に身を包んだ親父が足の折れたソファに腰を下ろしていた。

何の前触れもなく、人が驚く台詞をぽんと吐く所は兄貴にそっくりだ。

とはいえあらかじめの事情は聞いていたので、正直俺は話を適当に流し、さつさと家に帰りたかった。

けれど父の雰囲気はそれを許してはいない。

しかたなく部屋の片づけをするお袋を手伝いながら、両親の方からも一通りの事情を聞く事にした。

残念ながらこちら二人は兄貴より口数が多いので、寝るために自室に足を踏み入れたのは午前2時すぎ。

「お兄ちゃんが大変」とお袋から電話を貰った時点で今日は帰れない予感がしていたが、案の定泊まって行けと言いくるめられ、仕方なく自分の部屋に退散した次第である。

高校卒業と同時に家を出でからロクに帰っていないが、ベッドが多少狭いのを目をつむれば、久しぶりに足を踏み入れた自分の部屋は未だ落ち着く場所ではあった。

勉強机や本棚などは俺が家を出て行った当時のまま、机の引き出しを開けると見たくもない赤点の答案などもそのまま思わず笑ってしまっくらいだ。

だがそのとき、俺はふと妙な違和感を覚えた。

この部屋は長いこと使っていなかったはずなのに、タンスや机の引き出しが僅かに開いている。

俺の私物はあらかじめ居間のアパートに運んでしまったので、ここに入っているのはお袋が取っておきたいと言った俺と兄貴の子供の頃の服だけだ。つまり、そう頻繁に開け閉めする物ではない。

そしてよく見ると、床に俺の高校時代のアルバムや昔来ていた服などが不自然落ちている。

誰かが荒らしたのは間違いない。しかし一体誰かと考えて、俺は気付いた。

俺のベッドの中に、何かが潜んでいる。

不自然にふくらんだ毛布は呼吸するように上下しているし、耳を澄ますと穏やかな寝息まで聞こえてくる。

そこで俺は、兄貴の子供のことを思い出した。

まだ4つか5つだというその娘は、頭が良く好奇心が旺盛だと兄貴は言っていた。

探検と称して俺の部屋に潜り込み、好奇心に任せて色々な物を引っ張り出したとしても不思議はない。

そしてそのまま布団に潜り込んで寝てしまった、というのがおおよその筋書きだろう。

恐る恐る布団をめくれば、やはりそこにいたのは可愛らしい一人の少女だ。

その穏やかな寝顔に思わず苦笑して、俺はあることに気付いてしまった。

クローゼットの奥にしまっていたはずの高校の学ランが、何故か布団の間から覗いているのである。

捨てればいいのに、これはこれで記念だからとお袋が後生大事にとっしておいた物だ。

けれど本人ですら愛着のないそれを、なぜ目の前の少女が布団に引きずり込んでいるのかわからない。

その手の制服に変質的な執着を示す者はときたまいるが、この子はあまりに幼すぎる。さすがにこの年から変態だとは思えない。

次々浮かぶ疑問に混乱しつつ、俺は何気なく学ランの袖を引っ張ってみた。

とたんに少女の表情が強ばり、体が傾いた。どうやら学ランを握ったまま寝ているらしい。

ますます意味がわからない。子供が持ったまま寝ると言ったら普通タオルとかだろう。何で学ランなんだ、それも俺の。

息をのみつつ、俺は少女の側に膝をついた。

相変わらず眉間に皺を寄せている姿を見ると、学ランを取ろうとしたのは軽率だったと反省しかけた。けれどよくよく考えれば、別に俺が引け目を感じる理由はない。

それでもあんまり苦しそうな顔をしているので、俺は思わず少女の頭を撫でてしまった。そうすればまた穏やかな顔に戻る気がしたのだ。

けれどそれは失敗だった。

俺が触れた瞬間、弾かれたように少女が起きあがったのだ。

少女とキスと学ラン

目があったとたん、少女が息をのむ。驚かせてしまった事を後悔したが、後の祭りだ。

「これは夢ですか？」

幼い割に妙にしつかりした話し方をする子だと思った。

「驚かせて悪かった、俺は……」

「知ってます！ 真田博文30歳独身！ 多摩川高校の数学教師で趣味はツーリングと野球観戦で贔負のチームはジャイアンツで、特技は空手で好きなお酒は芋焼酎ですよ！ あとお酒のおつまみで柿の種が一番好きなことも知っています！」

輝く瞳は可愛いすがすがしいが、そのときの俺には彼女が得体の知れない宇宙人に思えた。

なにせ彼女の畳みかけるような言葉全て、恐ろしいほど当たっている。

「表札を見たとき、もしかしてって思ったんです！ あと写真とか汗のにおいが染み付いたシャツに書かれてた名前とか読んで、凄く期待してたんです」

じわじわと迫ってくる少女は、正直気味が悪かった。

「私かわからないんですか？」

その上少女は、驚愕のあまり動けないでいる俺の首に抱きついてくる。

そして次の瞬間、あるう事が俺は、この気味の悪い少女にキスをされていた。

体を引きはがそうとしたのに、恐ろしいことに俺はそれを受け入れていた。それどころか幼いそのキスを俺の体は懐かしいとさえ感じていた。

更に深い口づけを自分から行おうとしている事に気付き、俺は慌てて少女を引きはがす。

そこで俺は気付いた。

俺は、こいつを知っている。

「お前まさか……」

自分でも驚くほど声が震えていた。

その上答えを告げられる前から、体が幼い少女に引き寄せられている。

「千佳なのか？」

相手は子供なのに、抱き寄せたいと思っている自分が正直恐ろしかった。

「その呼び方懐かしいです！」

けれど俺がすくんでいるのは対照的に、千佳は俺の胸に飛び込んだあげく首筋に顔をこすりつけてくる。

「久しぶりに嗅ぐ先生のおいは格別です」

この変態的な言い回しは間違いない、こいつはこの俺を散々振りまわしたあの生徒だ。

「お前、どうして」

「どうしてって、死んだから転生しただけですよ」

こともなげに彼女は言い切る。

たしかに転生の話は散々聞かされていたし、最後の方は俺も彼女の話信じていた。

けれどまさか、こんな再会が起こると思っていなかった。

「まだ先生が生きててよかったです。先生まで死んじゃったら会うのもっと大変だし、また忘れられたらショックだし……。まあ、忘れられても私は何度でもアタックしますけどね！ 何たって私達は……」

運命の相手。

何万回と聞かされたその言葉をつぶやけば、千佳は嬉しそうにはしゃぐ。

「先生ちゃんと覚えてたんですね！ そうですよ、私達は運命の相手ですよ！ ちゃんと記憶してますね！」

「当たり前だ、お前が散々刷り込んだらだろう」

「でも不安だったんです。時間もたっちゃったし、またすっかり忘れてたらどうしようって」

千佳は言うが、俺はこいつのことを一秒たりとも忘れたことはなかった。忘れられるわけがなかった。

転生の話も、運命の話も、そして温もりと愛情すらも刷り込んで、そして彼女は消えたのだ。

彼女の死を思い出すたびに俺まで呼吸の仕方を忘れそうになるほど、深く深く自分の存在を俺に刷り込んだのはこいつだ。そのせいで、まともになるまで何年もかかったのだ。

けれど彼女は消えたとき以上にあっけなく、そして何の前触れもなく千佳は今ここにいる。

「どうして今頃……」

どこか攻めるような口調になってしまったが、詫びるより早く千佳は言葉を重ねた。

「本当はハイハイできるようになったら、すぐに先生のこと探しに行きたかったんですよ。でも今のお家がなかなか私に優しくなくて……」

だから時間がかかったと微笑む千佳の頭を撫でたとき、かきあげた髪の下に酷い痣が出来ていることに気付く。

嫌な予感がして服の袖をまくり上げ、そして俺は絶句した。千佳の体にはたくさんの痣や打ち身のあとがある。

「誰にやられた」

自分でも驚くほど低い声で尋ねれば、千佳の目が見開かれる。

「これは気にしないで下さい！ もうあんまり痛くないし、それに先生にぎゅーっとして貰ったらすぐ治りますよ」

「良いから言え！ 誰にやられた！」

もう一度同じ言葉で尋ねた瞬間、千佳が俺から飛び退いた。

「先生目が据わってます！ 今すぐウチのママを殺しに行きそうな顔してます」

「母親か」

しまったと口を開け、千佳は俺に縋り付いた。

「殺しちゃダメです！ 犯罪者になったら一緒にいられなくなりま
す」

「しねえよバカ。いらついているのは俺にだ」

「じゃあ自分を殺さないでください！ 年齢差が縮んで良い感じに
なるかもですけど、やっぱり私、死別はもう嫌です」

俺だつてごめんだという言葉を飲み込み、俺は滅入る気分を立て
直した。

「馬鹿なマネはしない」

「本当ですか？」

「っーか殺すつてお前、俺にそんなこと出来るか」

ヤクザじゃあるまいしと無理に笑った俺の視界に、千佳が広げた
のは俺の学ランだった。

やはりこれは捨てて置くべきだった。

そう強く思ったのは、学ランは学ランでもそれが普通の学ランで
はないからだ。

「でもヤクザ予備軍だったんですよ昔は」

丈の長い学ランって始めてみました、それにこの刺繍凄いです。

そう言つて、学ランを振る千佳の嬉しそうな笑顔が腹立たしい。

「安心してください、私悪い男も大好きです」

「何の話だ」

「とぼけないでください、ブツはあがってるんです！ 先生昔ワル
でしたよね！ アルバムとか見たけど、髪の毛やばい金髪でしたよ
ね」

やっぱり部屋を荒らしたのはこいつのようだ。

「暴走族っぽいバイクに乗ってる写真とか、ヤンキー相手に大暴れ
してる写真とか見たんです！」

こいつにだけには知られたくないと思っていた過去が、まさかこ
んなタイミングで露見するとは思わず、俺は悔しさで唇を噛む。

「盗んだバイクで走り出した過去があっても気にしませんよ！ むしろたくましい男の人大好きです！ 元ヤン大好きです！」

ってどうかバイク乗せてください！ タンDEMしてください！

あと学ラン来てください！ 金髪も見たいです！

矢継ぎ早に放たれる千佳のお願いに、俺は思わず頭を抱えた。

もし会えるなら、もう一度だけでも彼女に会いたい。

もう4年もたつのに俺はいつもそう思っていた。

けれど俺が望んだのはこんな再会じゃない。そう心の中で叫んだのに、千佳の大騒ぎは結局朝まで続いた。

クリスマスの朝に

翌朝、相変わらず元気な千佳をつれ居間に降りると、そこはお通夜のような有様だった。

部屋の隅に折れたクリスマスツリーがなければ、クリスマスの朝だと言われても信じられないような、痛いほどの沈黙が居間には漂っている。

「昨日の残り物があるから、食べましょうか」

と疲れた表情でお袋が取り出したのはこれまたクリスマスのケーキやごちそうだったが、電子レンジで再加熱されたそれらは、ご馳走としての自覚をなくし酷くくたびれている。

ちなみにお袋が言うには、このご馳走はすべて久方ぶりに帰ってきた兄貴の為に用意したらしい。

けれど兄貴の失態と父の怒りでごちそうを食べる余裕はなくなり、こうしてお通夜の添え物となった次第である。

唯一クリスマスらしさを誇示しているのは冷蔵庫の中で一夜を過ごしたケーキだけだが、お通夜状態故誰も手をつける様子がない。

チカだけは物欲しそくにケーキをじっと見つめていたが、それに気付く者もないので、柄にもないとわかっていたが、俺がケーキを切り分けることにした。

千佳の目の前にケーキを起き、それから俺は向かいの席に座った親父の様子をうかがう。

その顔は所々赤く腫れ上がっており、口の端も酷くきれている。それでもサラダを器用に食べているが、痛みをやせ我慢しているのは間違いない。ケーキは俺達で始末した方が賢明だろう。

「お父さん、チキン食べます？」

しかしこう言うときは特に空気の読めないお袋は、顔の腫れた父に一番食べにくいもも肉を差し出している。むろん親父は絶句である。

「あの、私ほしいです」

代わりにあの空気の読めない千佳が空気を読み始める始末だ。多分彼女もこの重い空気に何かしらの責任を感じているに違いない。というか実際原因は千佳である。

「兄貴は？」

仕方なく多少でも流れを変えようと声をかければ、突然親父の手の中で箸が粉碎した。そしてその表情は鬼のように険しい。

ちなみにこう見えて、親父は一般商社につとめるサラリーマンである。俺もたまに信じられないが。

「……出て行った」

静かに言いつつ、親父は二つに折れた箸を机に叩き付ける。

「この子を置いてか？」

「そうだ」

「あいつが貰ってきたのに？」

「そうだ」

「行き先は？」

「誰も知らん」

今度は湯飲み茶碗を粉碎し、親父は肩を怒らせている。

俺も人のことは言えないが、兄貴は前々から父を怒らせる天才だった。特に成人してからはそれが顕著で、俺が奇跡の更正を果たした一方兄貴は墮落の道を猛スピードで転がり落ちている。

だから兄貴が千佳を置いて逃げるのは何となく予想がついていた。というか実は家を出て行くところを窓から見ていたが、あえて止めなかった。ここに残っても兄貴が大人の決断をすることは絶対にならないだろう。むしろいらんことを言って親父と二日連続で殴り合いをするのは目に見えている。

だからむしろ俺はホツとしているが、両親はさすがに我慢の限界に来ているらしい。

なにせ中身は千佳とはいえ、子供の前で父親候補が消えたと暴露している位である。これはかなり頭に血が上っている。

「……博文、お前施設にアテはないか？ そう言つところから通つてる子もお前の学校にいるだろう」

こぼれたその一言を俺は予想していた。けれどやはり、口に出される胃が冷たくなる。

「この子を預けるのか？」

「可哀想だがウチで預かる義理もない。それに正樹を呼び戻しても、あいつのトコじゃ幸せにはなれないだろう」

そこには同意する。けれどだからといって、早々に施設送りを決断した親父に、俺は酷く腹が立っていた。

親父にここまで腹が立ったのは本当に久しぶりだった。たぶん千佳がお気に入り、あの学ランを着ていた頃以来だろう。

「じゃあ、俺が引き取る」

今度は味噌汁のお椀がひっくり返る音がした。

けれどそれは意外にも、隣に座る千佳の物だった。

彼女には赤の他人のふりをしろと言いくるめていたが、思わず俺の方がいつもの調子で声をかけてしまう。

「嫌なのか？」

「あの、えっと、出会えただけで胸がいっぱい同棲とか出来ると思つてなくて」

千佳の流暢なしゃべりに親父と母が一瞬眉をひそめた。けれどこいうう時の千佳は聡い、すぐさま子供らしい仕草で「こぼしてごめんなさい」と殊勝な顔をする。

「俺なら兄貴と違つて収入もあるし、独り身で金もそれなりに貯まってる」

「子供よりまず結婚だろう！」

「する予定はないし、家や車を買うつもりも今はない。丁度良いだろう」

言いながら、俺は反射的に体を斜めに傾けた。

直後、先ほどまで俺の鼻があった位置に親父が拳を突き出している。

「そんな勝手なことが許されると思うな！」

「そもそも最初に勝手なことをしてかしたのは兄貴だろ。家族の尻ぬぐいくらい、俺はするべきだと思うが」

「きれい事だけで子供が養えるか！ それに母親だって死んだ訳じゃない、養う前に母親を捜すなりすべきだろう！」

確かに正論だ。それに正直、俺だって千佳でなければこんな事を言い出していたとは思えない。クリスマスを理由に聖人になれるほど、俺だって善人ではない。

「わかった、きれい事はもういわない。俺はこいつが欲しい、だから連れて帰りたい」

今度は横で千佳がお茶をこぼした。

「それはお前、子供が欲しいって事か？」

「そうだ。新しい親がこいつにとって良い親になる保証はないし、俺だったらこいつを不幸にはしない」

「子育てもしたこともないくせに、何考えてる！」

「俺はもう、こいつをこんな痣だらけにしたくない。がりがりになるまで飯を食わせないようなやつの手にも渡したくない」

両親の顔が今更のように千佳に注がれる。驚くその顔に、俺は二人がこの時はじめて千佳をちゃんと見たのだと気付いた。

「こいつは俺が育てる。なんと言われようと」

俺へと視線を戻した親父は酷く怒っていた。けれどそれは、自分への怒りのようにも思えた。

「この分からず屋が」

生まれて初めて、生のちゃぶ台返しを見たのだろう。まあ正確にはテーブル返したが、宙を舞う茶碗に千佳が目を見開いている。

「お袋の側にいろ、近づいたら怪我するからな」

椅子を蹴り飛ばしながら親父を睨めば、彼は鬼の形相で俺に腕を振り上げていた。

拳骨と涙

千力の荷物を抱えて家を出ると、既に日は沈みかけていた。

今日の親父はやたらとしぶとく、まるでゾンビのように倒れても倒れても起きあがってきたため、気がつけばこんな時間まで家を出られなかった、と言う次第である。

それでも50回目のKOを決めると、最後は「出て行け」と唸り、いじけた子供のように膝を抱えていた。

それが少しおかしかったが、そこで笑うとまた拗れるので、俺は千佳と彼女の少ない荷物を持ち、もより駅までの道をゆっくりと歩いている。

「本当に良かったんですか？」

人氣が少なくなつたタイミングで、俺の袖を引いた千佳が、恐る恐るそう尋ねる。

「あの家じゃ、何かを実行に移すにはああするしかない」

「でもあの、おとうさん、ぼっこぼこにしてましたよね」

「あれでもかなり手加減はしてる。高校卒業したあたりから、あの家じゃ俺が一番強い」

だからはじめて親父を負かしたときから、俺は親父に逆らうのをやめた。

暴力一家に見えるが、親父は筋が通らない事で息子に手を挙げたりはしない。

粹がった勢いで親父を負かしたとき、俺はその事に気づき、同時に酷く後味の悪い思いをしたのだ。

だからあれ以来殴り合いは卒業した。むしろ馬鹿を続ける兄貴とめげることなくそれを正そうとする親父の間にはいるのが今の俺の仕事だ。

「先生のお家って、本当に変わってますよね」

千佳に言われたらおしまいだなと思つたが、普通か普通でないか

といえは後者である事は否定できない。

今思うと、そう言う普通でないことに慣れすぎていたから、「運命の相手です」と迫ってきた千佳を、俺は知らず知らずのうちに受け入れていたのかも知れない。

「でも悪い人たちじゃない。頭が冷えればお前のことも受け入れるくらいの器量はある」

「本当ですか？」

「腐っても女だし、可愛い顔してりゃあ親父もそのうちデレるさ」

俺の言い方が気に入らないのか、チカはふくれ面だ。

「でもやつぱり殴り合いはダメだと思います。喧嘩の最中、私30回くらい『私のために争うのはやめて』って言いそうになりましたよ」

「幼児がそんなませた台詞吐いたら、ある意味殴りあいも止まるかもな」

「じゃあ次もし私のことでお父さんとめめたら、言っていていいですか？」

「お好きにどうぞ」

想像すると笑ってしまいそうだったのでわざと素っ気なく言ったのだが、チカは相変わらずのふくれ面で俺の服の裾をぎゅっと掴んだ。

けれどコートは掴みにくいのか、彼女の腕はすぐに離れた。急いでまた腕を伸ばしているが、歩き方が酷くたどたどしいので腕はまたすぐ離れてしまう。

それが気になって見ていると、どうやら千佳は酷く疲れているようだった。

こうして見ると、チカはとても幼い。にもかかわらず昨晚酷くはしゃいだ上に、今日は一日起きていたのだ。そろそろ体力が尽きてもおかしくはない。

「ちよつとこれ持て」

とチカの少ない荷物を彼女に押しつけたあと、俺は彼女を抱き上

げた。

あまりに軽いその体に、俺は少し動揺してしまった。

今更のようにえらい物を拾ってきてしまったと自覚する。本当に今更だが。

「先生どうしたんですか！ 今日はいさく優しいですよ！」

「子供に優しくできねえだろ」

「子供扱いしないでください！ 今日から一緒に住むって事は、私は先生の奥さんなんですよ！」

チカらしい考えの飛躍に呆れつつもホツとして、俺は千佳の頭を優しく叩いた。

俺を見上げていたチカの目から、大粒の涙がこぼれたのはその直後のことだ。

叩いたことでトラウマでも蘇ってしまったのかと焦る俺に、チカが慌てた様子で涙を拭う。

「ごめんなさい。私ずっと、先生に呆れられたり叩かれたりしたくて……。だからこうして貰えて凄く嬉しくて……」

お前はどれだけ変態なんだとわざと呆れた声を出せば、千佳が泣きながら笑った。

「だつてずっと妄想してたんです、先生に再会できた時のこと」

「妄想つてお前なあ」

「私、先生としたいこと沢山あるんです。前の人生よりもっともつと好きって言いたいし、今度こそ沢山キスしたいし、先生の笑顔も沢山見たいし、拳骨も喰らいたいし。あと罵詈雑言も欲しいです。」

だからもっと罵ってください、叩いてください、なじってください。恐ろしいお願いを次々言ってから、千佳は俺の肩に顔を強く押しつける。

「私、叩かれるなら先生が良いんです」

それは酷く小さな呟きで、千佳は俺に聞かせる気はなかったのだらう。

次の瞬間にはまた笑顔が戻っていたし、そこに弱々しさはなかつ

た。

でも俺だって馬鹿じゃない、千佳が酷く無理している事くらいわかる。

彼女が俺との再会ばかり考えていたのは、きっと運命の相手だからと言っ以上に、この4年間が彼女にとって良い物ではなかったからだろう。でもそれを千佳は俺には言わない。

彼女が語るのは今も昔も俺との事ばかりで、辛いことも苦しいことも俺には見せようとしないのだ。

それが酷く歯がゆくて、でも今ここで無理に聞き出すべきでないのもわかっている。

千佳がそれを口にするまで待とう。そしてそのときまで、今度こそこいつを手放さないでいよう。

彼女に悟られないよう俺は決意し、千佳の頭を乱暴に撫でた。

「本当に変態だな」

俺の呆れ声に、腕の中の千佳は本当に嬉しそうにはしゃぐ。

「もっとお願いします!」

「ガキ、チビ、幼児、ぽっちゃり」

「ぽっちゃり! ぽっちゃりはさすがに酷いです、ちょっと丸顔なだけでしよう」

「なじれと言っから言っただんだ」

「じゃあ今度は、褒めてください!」

正直褒めるべき場所が見つからず、俺は黙り込んだ。

「褒めるところないと思ってますね! 透けてますよ、考えが!」
むくれているが、千佳の涙はいつのまにか消えていた。

そんな彼女の髪を乱暴になでたあと、俺は彼女の気付かれないよう、額の痣にさり気なく口づけを落とすした。

「いくら考えても、褒めるトコなんて見つからんな」

「たったしかに今はこんなですけど! でもいつか凄い美人になりますから! おっぱいも大きくなりますから!」

「これじゃあ無理だろう」

「大丈夫です、先生がもんでくれれば大丈夫です！」

むしろ今すぐもんで下さいと服の裾を刷り上げる千佳に、拳骨を落としたのは言うまでもない。

「……やっぱり、先生の拳骨は最高です」

だからもう一回お願いしますとすり寄る千佳に、俺はため息をこぼす。

こいつは自分の事をあまりに理解していない。記憶があるうと変態だろうと、外見上こいつはまだ幼児なのだ。

故にここははじめをつけるべきだと決意した。主に自分の感情に。

「お前は俺の恋人ではなく養子だ」

とたんに千佳が喚きだしたが、ここは心を鬼にして、家に着くまで何度も何度もお前は「養子」だと繰り返した。

もちろん本当は養子と言うより嫁を貰ってきた感覚に近かったが、そんなことをチカに言えるわけがない。

そうしなければつけ上がった千佳が暴走して、えらい目に遭うにきまっている。

だから千佳が普通の子供としてちゃんと暮らせるようになるまで、節度は保とうと俺は決意した。

「そう言っでいられるのも今のうちですよ！ 私の魅力で、先生絶対ムラムラしますから！」

千佳の台詞に嫌な予感も覚えたのも事実だが、もちろんそれは聞かなかつたフリをした。

襲撃とプレゼント

唇に触れる暖かな温もりを感じながら、俺はゆっくりと目を開けた。

いつの間に寝ていたのだろうかとぼんやり考え、そして俺は僅かに開けた口に進入する小さな舌に悲鳴を上げかけた。

自分に縋り付いている体を引きはがし、俺は思わず口を手で覆う。「何してる！」

「プレゼントを貰っただけです！」

「おまつ、舌入れたらう！」

「安心してください。ほら宿り木です、この下でなら誰とでもキスして良いんです。先生も変態と言われずにすみませう」

そう言つてチカが振っているのは、どう見てもそこら辺で拾つてきた木の枝である。

「一歩間違えれば変態扱いされるとわかっていてあえてやるな！」

「だって欲しかったんです！ 先生との熱いキス！」

熱いどころか寒気がしたというのが正直なところだ。寝込みを襲われて、それも相手は幼児だ。愛情を抱いているとはいえ、さすがにこれに欲情は出来ない。

「自分の布団に戻れ！」

「いやです、今日は先生と朝までイチャイチャするんです！」

「寝ない子のところにはサンタは来ないぞ」

「サンタになる気なんてないくせに！」

「それは残念だな、お前がほしがってた物を頼んでおいたのに」

わざとらしくチカを退けたが、彼女は疑いの目を俺に向けている。本当はこんな早く見せるつもりはなかったが、調子に乗るチカを懲らしめたくて、俺は押入に隠してあつた秘密兵器を取り出す事にした。

「そっそれは、それは！」

叫びながらにじり寄ってくるチカの目に映っているのは、チカと再会したあの日、彼女が抱きしめていた俺の黒歴史である。

事ある事にあの学ランが欲しいというチカがあまりに五月蠅いので、この前お袋に送ってもらったのだ。

「くれるんですか！」

「良い子にするなら」

「します！ 絶対します！ だからそれを、それを下さい！」

あまりに必死なその目にギョツとしてみると、チカは学ランをさつと奪い、それを顔に押し当てた。

結局、俺は最後までチカのペースを崩すことは出来ないらしい。

「高校時代の先生のおい、ぐへへ」

将来が心配になる笑い方ではあったが、あまりに嬉しそうなので俺は学ランを羽織ろうと奮闘するチカを苦笑混じりに眺めていた。

「言っておくが絶対外に持ち出すなよ」

「持ち出しません！ 汚したくないですから！」

大きな学ランに包まれたチカは、見ているこちらが照れるほど、大事そうに袖を触っている。

「ありがとうございます、本当に欲しかったんです」

「こんな物のどこがいいんだか」

思わずぼやけば、チカは懐かしそうな顔で学ランに頼ずりしている。

「この学ランを抱きしめたとき、私確信できたんです。ここで待っていれば、先生が私を助けに来てくれるって」

言いながら不自然に顔を傾けたのは多分、俺に見せたくない物が目からこぼれたからだろう。

「ホントいうと、あのときの私は痣だらけだったし、痩せてて全然可愛くなかったし、先生に会うのが少し不安だったんです。でもこの学ランを羽織ってみたら、先生にぎゅっとされてるような気になって。きっと先生はちっちゃくても痩せてても痣だらけでも、私のことをまた好きになってくれるって思えたんです」

全部この学ランのお陰なんです。

そう言って微笑むチ力があまりに乱暴に涙を拭うから、俺は思わず彼女の腕を捕らえ、そして抱き寄せていた。

「俺は運命の相手なんだろ？」

「でも不安になることもあります」

「柄にもないこと言うな。そんな弱気なやつには、プレゼントやらんぞ」

「こっこれはもう返しませんよ」

「プレゼントが一つだと言ったか？」

告げると同時に唇を奪いながら、俺はチ力を包んでいる学ランの襟を引き寄せる。

そのまま一瞬だけ舌を絡めてやれば、チ力は幼児とは思えない甘い吐息と共にそれにこたえる。お陰で更に舌を突っ込みそうになったが、何とかそれだけは回避する。

「変な声だすんじゃないよ」

「せつ先生が不意打ちですから」

「欲しいって言ったのはお前だろ」

俺の言葉に、真っ赤になった顔を隠すようにチ力が学ランの襟を引き上げる。

「先生、私幸せです。幸せすぎて死にそうです」

「今度死んだらマジで怒るからな」

「安心してください、今度死ぬときは一緒です」

同じお墓に入りますと笑顔で言い切る5歳児に呆れながら、俺はもう一度彼女の額に小さな口づけを落とす。

本当はこんな事をすべきではない。そう思いつつもチ力を手放せないあたり、完全にチ力の予言は的中している。

断じてムラムラまではしていないが、こいつを喜ばせたい、甘やかしてやりたいと思う気持ちは否定できない。

「まあ、誰にも見られなければいいか」

言い訳のようにそう言って、そして俺は気付いてしまった。

「おい、何でカーテン開いてんだ」

確か閉めたはずだと主張すると、チカがばつの悪そうに微笑む。

「月明かりに照らされる先生の顔って、凄く素敵じゃないですか。だからその、つい鑑賞したくなって……」

「素敵じゃないですかって知るかそんなこと！ とにかく開いたら閉める！ 誰かに見られたらどうする！」

「もう夜中ですよ、いるとしたらサンタさんくらいです」

チカの馬鹿な発言に苛立ちつつ、俺は慌ててカーテンを閉めようとした。

だがそのとき、俺はそれと目があってしまった。

ベランダに何故か立っているそれは、クリスマススの赤い聖人。それが、プレゼントらしき箱を持ったままこちらを見ていたのである。

「サンタさんだ！」

と俺の間隙について窓を開けたのはチカだ。

こう言うときだけ子供モードにならないで欲しいと焦った次の瞬間、サンタは俺に右ストレートをつきだしていた。

それを寸前の所で避けたとき、俺は気付いた。

このサンタは、ガキの頃俺にプレゼントを運んできたサンタと同じ人物に間違いない。

気付くと同時に思い出したのは、昼間かかってきた母からの電話だ。

『そろそろお父さんが仲直りしたがってるみたいなんけど、クリスマスにチカちゃんと来れない？ あの人、何か無駄に張り切ってる』

今更母の呆れ声を思い出してもあとの祭りだ。サンタは、確実に俺を殺す気にいる。

結局その後1時間ほどサンタと殴り合いをしたのち、その日は朝までかけて、俺は最もばれたくない相手に俺の奇妙な恋人の話をする事になった。

それをサンタが信じたかどうかは定かではないが、後日「チカちゃんはおせち料理好きかしら？」と母からメールがあったので、親

子の絆はかるうじて繋がっているらしい。

「お父様公認ですね」

とチカが調子に乗るのも、きっと時間の問題だ。

再会は突然に【END】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3391y/>

359回目のプロポーズ

2011年12月29日16時52分発行